明治三十年一月二十五日

女學雜誌

第四百三十四號

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

第四百三十四號目次

皇太后宮陛下崩御

社説 無常に感あり◉御養蠶

女學 國家たる家の女學　決死の覺悟　婦人の高功
行政に際して我が男女生徒站の研究の七女史を憶ふ
（女學校の育兒科　一家の仕方　年頭所感

評論 政治界　如雲散士

教育 今の武官　教育家は其職を重んぜず（曲浦）小柳
好弟子なし　教育者は大思師なり　婦人教育
品さへ良くば　俗事を學むは大俗なり　教育品の害
教育者に就て　宗教教育と兒童研究　大阪博覧會
教育　教育　北の海

雜録 若松賤子の著書（國中認付）菓子に與ふるの書
（留和伯父）小説物語（上）おッそれ

随感 新年を馬鹿にすべからず　老人を馬鹿にすべからず
ならず馬鹿らしき人を馬鹿にする事勿れ　村木
家中川翁　文の稲に讀ます、相に讀む

時文 新小説第一年第一號　神の小島　櫻元谷　一葉
今集

片々◎時報◎廣告

社告

◉本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

●十日發行の分は稍や簡易實際を專らにし、第一、家庭の整理改善に益ある事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女界教界に對する吾黨多年の主義を發表するもの。

○單に十日發行の分のみを購求せんと所望せらるゝものあらば、其望に應ずべし。

女學雜誌定價表

前金	一冊價　金拾錢 一年前金　金貳圓（無郵税）
廣告料	一行一回廿字詰　前金十錢 同三回以上　一割引 同六回以上　二割引 但し不適當なる廣告は謝絶す。慈善の廣告は本社の都合上無代價にて引受く
送金	爲替は東京郵便局に宛て小爲替にすべし郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割増を添ゆべし
注文	注文は東京麹町區下六番町六番地女學雜誌社あてにて申越さるべし

第四百三十三號目次

口絵 「天問」　獨國ブロックホルスト畫

社説 四方拜◉積善の家餘慶あり

講義 正月の遊戯

家庭 太陽暦の家庭◉一家經濟の整理◉ただきおまえ
（女子手藝の案内（刺繍法。刺繍の種類。木綿糸ぬひ。本糸ぬひ）◉音物の一情誼（前村）◉四十
年間呉服屋の經驗◉料理番の一説

史傳 史料散録　如雲

問答 本年の時勢如何

文藝 文藝の道　山下石翁

兒籃 雲雀　さち子

雜録 天明の歯に親す　長汀
東京を來地の制本に寄す　りんきさいさめ（美代女）
世の形のいひ方（さよ子）海士をさめ
（留文）花袋　ふるな（留文）高瀬花陵

随感 新しきものは何事ぞ◉日輪の影、人情の色◉死
林檎斷片（其果るや一なり）◉家庭の大勢◉李笠庵
（總勢）◉佐傚の主旨快樂に非す

時文◎片々◎時報◎廣告

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

皇太后宮陛下崩御

陛下忽ちかくれさせ玉へり。臣民にはかに光を失ふ。今
年の春は如何なる春ぞ。一陽來復して天下あはれを催す、
空しく宮城を拜して暗涙にむせばぬものもなし。
先帝、大御心を革命に寄せ玉ひ、慘澹たる御經營の苦辛、
まさに成らんとして俄に崩御ましませしより、
今上皇帝、御心をつがせて莊嚴偉烈の御政あり、維新
決してこの方三十年、王道率土にうるほひて衆庶悅服
し、來る一月三十日には、
先帝三旬の御弔ひを申上げ、玆に盛大なる御祭事のあら
んとせし今日このごろ、日夜
先帝の御偉業に内助ましましける此の大君の、今日と云
ふ今日たちまちにして登り遐き玉はんとは何事ぞや。西
の都の人々は更にも言はず、洛陽の山河頂をのべて遙に
望み、
陛下の御啓近づきたりとのゝしり、山草みどりを増し、
河流歌を高くして御待うけも申上げつらんに、今狀乃ち
斯の如し。其の歎きの程こそ察せらるれ。
遠き古への事は知らず、新しき日本、明治元年に始まり
てより。かしこくも、
陛下と仰ぎ奉つる御方を失ひしは、此度を最初とす。今
日までは、斯る事の思ひも寄らず、もとより其の感覺は
未曾有なりしに、乾坤變じて一大事に出で會ひ、初て、
宮室にも亦た無常の事のあらせ玉ふに氣付きぬ。承るに
皇帝、皇后兩陛下、御風氣の折柄、鹵簿の調ふをも待
たせられで、青山なる御所に行幸啓せられしとなん。恐
れ多き申條にてはあれど、
三陛下御對顏あらせられし御節、一天万乘の御方々とは
申し乍ら、御親子永別の御情懷、さすがに人性の免れが
たき、御歎きの程こそ、恐察し奉つるだに涙なれ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

皇帝陛下忽ち沼津離宮に勅電あり、葉腦より御違例にて茲に渡せ玉ふ、皇太子殿下の還啓をとゞめさせ玉へり。遙に念ず、殿下の御恨みも深かるべけれど、陛下、無常をはからせ玉ふ御慈しみの深き哉。かなた此方を見まゐらすれば、臣民面をあぐるものなし。何事も新しき悲歎に沈みて、只だ唯だ斷腸の心禁じがたくこそあるめれ。閣中の大臣、夜を徹しての務あり。上下二院、爭をやめて深く悼む。國中万戸、弔旗を掲げて御悲しみを表す。實に浦さびしき新年ながら、百姓の子民國母の御ひつぎを送り奉り、仁慈深厚なる御道徳を長久に念じて、一新王化の大御心を限りなく奉體せんこと、乃ち臣子たる吾等の義務、又、吾等の慰藉たるべけれ。

明治三十年一月　　女學雜誌社長　謹記

女學雜誌

第四百三拾四號

明治三十年一月二十五日發兌

社說

無常に感あり

かゝやける太陽には哀れもあるまじく見ゆれど、入峽の山に没せんずる夕日の影こそ寂しけれ。滿月中天にかゝりて萬草鏡を磨くの夜は、遊子も心うかれて吟行すらく覺ゆれど、追々に缺けゆく望後の姿こそ悲しけれ。月は滿なんとするのみ日は昇らんとするのみと思ひし人の、忽ちにして諒闇に會す、慨歎何ぞ禁ぜん。何日までも、何日までもと思ひしは空なりけり。萬歳、萬々歳のことほぎも實ならず。所詮は御別れ申すとのありと思へば、人世の緣こそ淺ましけれ。此の國、外國と異なり、此の

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

民、異人と似ず。大むかしより吾が皇室に随ひ参らせて、遠く近く實緣のはしに結ばざるはなし。然るに人事七十年あるは古へより稀に、遂には因緣分離して、かの蒼々に飛散すべき乎。御慕はしき方のなつかしきに、さりとては亦た淺々しからずや。

大なる母、庶民の子を遺して遠く登り遐き玉はんずる御歎きこそ深かくはありけれ。一方ならぬ艱難の中に之を救ひて、東西の知れぬゆくてに親しく導びき、三十の齡を重ねしめて、大方の壯丁とはなし玉ひける、愛着の御心深きがうちに、せめては最早や獨歩すべしと思し召れけん。或ひは否か。雲かくれさせ玉ふ君の御心を慰めまつるは、たゞ此の獨歩を果して實行し得べきにあり。

たゞ一とわたりの文の形容とは思ふべからず。非情の山河草木の情に動くと云ふは眞なりけり。六十餘年の此國の大母を失ひては、天地も寂然として哀れを催すなるべし。六合、自づと感動し、吾等が心と相應ず。明治三十年は人々何となう重々しかるべし。省て重厚の沈思に打れざるものはある可らず。

樹の静かならんとする時、風休ず。万民一和して、宸襟を安んじ奉つるは、幾何年ぞ。同胞の睦まじきは、親なる人の無上の樂しみとは聞きつるに、四民間斷なく爭ひ、黨派徒らにたがひに鬩ぐの族よ、いつまでか其の慈親の心を難ませんとはする。朝露遂には散ずべく、暮雲到底は消ゆべし。嗚呼、百歳の後、千回の悔をかさぬるは、眼前速かに改たむるには及かじ。

さきには大詔煥發して朝野頓に和せり。こゝに親愛崇敬すべき御方の果敢なくならせ玉ひ、御言葉の心を遺して、子民の相親しまんとを祈らせ玉ふ。聞かざるの悟りは聞くに優れり、人々何すれぞ悟らざる。

臣民に君なきはなし。されど親なきも亦たあらず。若し夫れ早く慈愛の御方に別れたる人は、墳土に一杯の水を手向けて殊勝に感ぜよ。若し尙ほ老年の御方に仕へ得べき人は、生前孝養をつくして憾みなく忠なれ。百花久しく保たず、流水忽ち見えず、人生の常なきに感慨せざるは誰ぞ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

御養蠶

始あらざるはなけれど、終あるものは最と稀なり。一旦、革新に心ありて慨然有爲の氣象を起し、猶つて創業の艱難を踏み破るものは多からざるにあらず、但だ功成り業定まるの後能く奢らざるものは少なしとかや。人情免かれがたきの弱點を、人臣以上の界にまで推論するは恐れ多き事なれど、昔、後醍醐帝、革新中興の偉烈あらせ玉ひしにも拘らず、帝業略ぼ成りて、勤儉の政すでに弛み、宮中歌舞行はれて、武夫、外に脾肉を嘆ぜしものありとは申す。

爾來宮室久しく振はず、王政、古へに復ることなかりしかば、徳川氏の奉侍を以てして猶ほ米十万俵に過ぎず。紫宸殿の雲、色うすく、左近の櫻、花こまやかにして、供奉の景色至つてさびしかりしが、幕府倒れて帝政一新し、國内の租貢悉皆殿下に集まりて、復た昔日の乏しきとあらず。宮室の御用は只だ命あらせ玉ふまゝとはなりぬ。然るに 兩陛下、勤儉尙武の御心掛、毫しだに弛ませ玉はざるは申添ふるも恐也。

皇太后宮陛下、御用意太だ堅固にして、些かの浮華をも惡ませ玉ひ、御宮居、御供奉、惣べて先々の如く、決して躁進を許し玉はず、斷じて奢りを斥け玉ひぬ。

加之、新宿御料地内に數多の桑を植させ、青山御所にては御親ら蠶を飼はせ玉ふ。此事、去年に至る迄で廢し玉はず、御老躰の御難みをも忘れて年々苟くも怠たらせ玉ふとのなかりしとぞ。

夫れ、天が下の万物皆な帝室の御所有の如し。御一人の御好み御樂しみに幾何を傾け玉はんとも何程の事のあるべき。民皆な悦喜獻上し、只管ら御用の料とならんとをこそ熱望すべけれとは申せ、 陛下前代の質素を忘れさせ玉はず、終始一貫して、御費用依然舊の如しと申すとの如何にかしこき哉。是れ此れ臣民の室家に垂させ玉ひし御模範の第一なり。惣じて經濟の危難は、乏しき時にあらずして、富める時にあり。一旦、心驕り氣弛みて、趣構、大ざつぱとなれば、万一の不足ありしとき、困苦は前日に倍し、殆ど亦た忍びがたきに至るもの也。故に、元來貧しき人に苦しみなし、一度、富

みて而して落ぶれたる人の不平は遂に慰めがたしとかや。此をもて、賢者は、容易く生計を擴めず、地位收入、俄かに進みたりとも、依然として昔日の觀を改むるとなし。昔、孔明、丞相となりて田畝を忘れず、其家の家政は毫も變るとなかりしとぞ。

近年、我國に巨億の金貨到來せり、こは償金と號するものにて、俄に他國より貰ひ受けしもの也。夫れ俄分限の奢りは、產を破るに了ると云ふ。二年來、興業の熱俄然として昂り、暫く、邯鄲の夢に醉歌して、近ごろ續々倒るるものの多き、亦た一の殷鑑なり。

左れば、始あるものは能く終を愼しみ、革命の氣象を最後に維持し、進步の精神を功成るの後に持續けて、未だ俄かに安心すべからず。奢は是れ吾敵として、死する迄で、吾が手足を啓く可らず。重きを負ひて遠きに行き、戒愼して久しく放念せざるこそ御敎へなれ。

此の御敎への事實に顯現したる明白の御模範は、養蠶にあり。夫れ、宮中御養蠶の事や、前古亦例あり。代々の賢后、屢ば此の美績を垂れさせ玉ふ。茲に臣民の婦人、此の範に則

とり、心を敬し、身を儉して、此の業に勤むるとあらば、單に其の德の麗しく、其家の優なるのみならず、正に是れ、皇太后宮陛下、御親ら則を示し玉ふの女藝に順じて、畏れ多くも、其後に伴ひ參らするの光榮を受るにてありけり。

女學

鎭臺たる室家の女學

打ち寄する波あり、打ち返す濤あり、行くと還るとは同じからねど水や一なり。或ひは躍つて蛟龍の姿となり、或ひは落ちて奈落の底に入る、波濤の上下互ひに異なれども、水や亦た一なり。水の性、平を好む、定まりて沈着せずば止まず、之を稱して水平とは云ふ。

孟子曰く、一治一亂と。觀じ得て天下の大勢を道破したる哉、こゝをもて、或る時は、集權の姿となり、又或る時は、分權の姿となる。學者、此の姿勢に名づけて、或ひは郡縣と云

ひ、もしくは封建と云ふ。其名同じからず、其の趣きも亦た異なれど、治世の要道に至りては、即ち一、喩へば、万狀千態の水ありといへども、其の性を究むれば、乃ち一なるが如し。

今や郡縣の世となりて、台閣、主府に嚴立し、知縣、治郡の官吏之より命派せらる。盛んなる哉、中央集權の政や、台閣一令を發して率土忽ち電受し、今朝の一法、夕べを待たずして全地に行る。誰か其の鋭敏迅速に感歎して、施政の周密なるに驚かざらんや。

左れど此は皮相當座の感歎に過ぎず。仔細に穿鑿して其の實相を究むれば、豈に圖らんや、治世の要道は古今東西その軌を一にし、依然たる從來の實地に新規の空名を飾りたるに過ぎず。世は到底各地の豪族によりて支配せられ、中央に位高き空拳の讀書先生に動かさるゝとは至つて薄弱なる所以を發見せん。但だ夫れ一時の大勢を左右し、所謂る革命の名を以て事物の名と外相とを變易し、其の動搖全地に行渡りて暫く中央より軍隊的命令を發布するの當座にありては、即ち、知事、郡長に格外の勢力あるを見ん。又此の勢力によりて

六

多少の新政の行はれ得べきを見ん。然りと雖ども、是は革命時代當座の餘波たるのみ、何ぞ久しきを得ん。事物に變あるは、天に雷電あるが如し、たゞ激烈にして暫時なるのみ。若し夫れ常に還りて其の久しきに涉るものよりして論ずれば、如何んぞ中央の派出する所のものに長遠の勢力を望むとを得んや。昔し、能登守、佐渡守と云ひて一生、能登佐渡を見ざりし國守あり。惟ふに今の縣知事も遠からずして空名を頂戴し、親から各地に出張せずして中央に滯留するものとやならん、此れ其の勢力の追々に減却して縣地に行くも何等の効なきに由る。其の勢力の何故に減ずるやを問はば、他なし各地の豪族の次第に勢力を增すによる。各地の縣治は、直接に、間接に其地の豪族によりて支配せらるべし。其の支配すべき道筋は、或ひは府縣會の機關によるか、もしくは之をも無用として古來在のまゝの手段によるかは暫く論ずる莫れ。到底、此等の豪族によりて支配せらるゝや一なり。既に豪族によりて支配せらる、知事によりて動かされざると知るべし。知事にして若し此等豪族の意向に反すれば忽ち追はるべし、如今既に榮轉願の所作あり、夙く此邊消息の機微を見めすに

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

あらずや。

歐米文明國爲政の大要亦た之と異なるとなし、即ち之によりて代議政なるものあり、亦之が爲めに自治政の名あり。所謂る代議政もしくは自治政なるもの、豈に獨り歐米國の創設に係らんや。吾國古來既に之あり。豈只だ我國既に之ありと云ふのみならん、大凡そ治安あり、政道あるの國家や、皆な悉な此の實地なくんばあらざる也。但だ其の名と形との異なるが故に人暫く眩惑す。今の政士、日本在來の自治の仕組を妨害しつゝ、別に外國の自治制なるものに驚歎す。則ち急忙として獨逸もしくは英吉利の自治制を研究せんとするに至る、識者ありて之を見ば豈に憫笑に堪へんや。

左れば憶ふ、國家治安の實力は、其の所在を轉ずると之より彌よ早急ならん。蓋し、國會より、府縣會に移り、府縣會より豪族にうつり、豪族即ち國家根抵の實力を握らん。固より中央に輔弼の良相あり、潛暗默々の裏に天下の大勢を決せざる可らず。斯の如き大政治家の中央附近にあらんとは言ふを待たずと雖ども、其數や固より多かる可らず。他の揚々たる幾多の政治家先生、もしくは讀書家先生に至ては、遂に碌々たるを免れじ。

左れば見よ、各地方の豪族は即ち是れ各地方の鎭臺なり。其の慈悲と、其の德化と、其の智力とによりて、一地方を鎭撫し、或ひは、直接に、もしくは間接に、民の煩惱を慰め、敢て騷動すると莫らしむ、是れ乃ち實際の郡長なり、實際の縣知事なり。

熟々惟ふに、今後の大勢は、豪族發達して、益々其の威力を増加するにあり。其勢の極まる所、豪族互ひに競ひ、一種の戰國を起し、六雄八將互ひに擧つて而して後ち郡縣的一統を了するの英雄出づ。此英雄の生命活動するの間、所謂る中央集權の變を奏して、暫く國家一新の機會を作るべしと雖ども、之も亦た暫くにして解け、漸くにして豪族制度の水平に反らん。西洋人之を稱して自治と云ふ、我國の歴史之を示して豪族政治と稱ふ。名の異なるによりて實を不同となすは迂ならずや。

左れば見よ、各地方に豪族の鎭臺ありて此の鎭臺を鎭むべき實際の治者は誰ぞ。世人單に皮相に着目するが故に、大抵女性を忘る。而も試みに豪族の一家の治亂は、最も多く何人

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

によりて支配せらるかと問へ。茲に婦人の勢力を認たむると能はざるものは、人生の機密を談ずるに足らざる也。

今の女學界注意すべきもの尠なからずと雖ども、かの豪族の内治者たるべき婦人の教育に於けるほど緊要なるものはあらざる也。凡そ國家の大事は壯語にあらず。仔細に要理を詮じて其の究極する所を思はば、意外の地に樞機の存するを見ん。道の遠きにはあらず、近きを忘るゝのみ。今の女學に任ずる者の深かく抱負すべきは、第一に此れ也。

決死の覺悟

婦人、男子を輔けて大丈夫の事を遂行せしめんとす。所謂る富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はざる底の烈操を守らしめんに、内助者たる人の覺悟尋常にして可ならんや。

凡そ好く謀むるものは多く言はず、眞に憂ふるものは騷々しきとなし。婦人、濃やかなる情愛をもて周密なる助力を獻げんとするとき、自から閑雅貞靜なるは、固より其の分なり。只だ、はしたなく口さし出し、賢こ風すと見下げらるゝをも知らで、巨細となく吾才を用うるは愼しむべきの極ならん。惣じて心得ある婦人は、斷じて斯る淺墓なるとを爲すまじきなり。

夫れ、最敬最愛の吾良人に何かの缺點ありとし、此の缺點を無情なる世人が批評の矢面に曝露するは、妻たるものゝ身に取りて、何等の痛苦なる乎。左れば、世人が彼此と申し出さざるうちに、不肖なりとも妾より先づ申上て、千慮の一失を改ため玉はんやうに懇請せんとするは、妻たるものゝ至情なるべし。妻たるものが未だ此處に氣付かざる先に、早く既に最親の良人をして天下冷酷の痛罵の中に立たしめんは、妻の恥辱なり、否寧ろ其の不貞なり。況んや、此の時、只だ但だ媚ぶるを知りて益するを知らず、痴娥、遊野郎に於ける態度をもて天下泰平とうたはんとするに於てをや。貞ならざると之より甚しきはなし。言語同斷の沙汰なり。

故に、なまじひに喙を外事に挾みて、よくも知らぬ所置風に彼此の小才覺を申出るは固より戒しむべきとながら、事の道義精神に關するもの、品德操守に關するものなどは、たとひ

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

外事の經驗なき婦女子の身にありとて、もしも眞人の心に入りて同胞の熱血を交通し居らんものには、直ちに感じて逸早く悟ることを得べし。氣の飢ゑたる、眞心の落付かざる、腰の据らざる等は、直にも妻たるものゝ身に感ぜらるべき也。是れ此れ眞人自から疚しとして密かに恥るの時ならん、左らばたとひ何等の才覺をもて世事を巧みに操つり居らるゝに關せず、必ずや遠からず宜しからぬ結果のあるべしとは、容易に感じ得らるべき也、たとひ外事の經驗には疎き女の身なりとも、直ちに眞人の心より推して、現在、眞人の爲しつゝある事業の危ふきことを知らるべし。乃ち是れ内君非常の覺悟を以て助力すべきの時なり。

則ち如何にか助力すと云ふ。茲に一々其の法案を擧げがたきは當然ながら、要するに、非常の決心を以て之に當らざる可らず。但だ緑の黒髮を斷ち、花の衣裳を賣り散らす如き事にて濟むべくば、事躰の猶ほ容易なるもの也。身を投じ、肉を劈きても、猶ほ甘んずるは固よりの事ながら、惣じて斯る時の第一の覺悟は即ち決死の精神にある也。古より、烈婦、刄に伏して義烈の事に諫めたるものあり。其範、凜然として活けるが如し。千古の知己、碧天の上にあり、紅血を迸ばしらせ、肝膽を絞り盡し、吾が最愛の眞人をして大丈夫たらしめんとす。一念徹する所、鬼神尙ほ慟哭すべし。烈婦此時此の氣象なかる可らず。貞婦、事ある時、此の烈婦とならずんばある可らず。

故に見よ、女學教育の最後の精神に於て、女生に與ふるに此の一大覺悟を以てし、決死事に當るの氣象を涵養するなくば女學の味ひも亦た淺しと云ふべし。而して、女生に與ふるに先だちては、教育者其人にして豫かに此の精神に滿たざる可らず。無より有を生ぜず、春暖なくして如何で花を開かん。教師未だ此の決着あらずして何ぞ能く子弟に求めん。子弟たとひ天稟の質ありとも、之を温ためずんば如何んぞ能く煥發せん。今の女學に非常の覺悟を要するもの切なるが故に、先づ以て教育者其人に此の非常の覺悟を求むること切也。

雲の上ゆくすゑ遠く見し月の
光りきえぬときくぞわびしき

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

彼萬里倉兵站病院の七女史を憶ふ

廿七八年戰役事件の論功行賞は、今や當時病傷兵士の看護に盡瘁したる婦人諸氏に及んで、客臘廿五日高山みつ子、新島八重子、大久保てる子以下賞を受くるもの六百三十人あり。其賞を分つと勳七等寶冠章一時賜金百五十圓以下、一時賜金三圓に至るまで、等差十四級とす。日本婦人、公務に從事したるの廉を以て、官賞を授けらるゝ事、開闢以來、實に之を以て嚆矢となすべし。今其等差の別に從つて、受賞者の人員數を分配するに左の如し。

勳七等寶冠章賜金百五十圓		一人
同	賜金七十圓	一人
同	賜金五十圓	一人
勳八等寶冠章賜金三十五圓		七人
同	賜金二十五圓	六人
賜金	三十五圓	二人
同	三十圓	四人
同	二十五圓	三十七人
同	二十圓	五十一人
同	十五圓	八十九人
同	十圓	五十四人
同	七圓	百二十九人
同	五圓	百三十八人
同	三圓	百十三人
總計		六百三十三人

吁盛んなりといひつべきかな。吾人は實にこの六百三十三人の姉妹に對して、長時の勞苦を謝して、其受賞の今日あるの榮擧を慶賀せずんばあらず。

然るに今吾人は多くの姉妹の芳名中に就きて、爰に最も紀念すべき七人の榮名を認め得たり。其七人とは即ち第十一等の賞賜を受けたる姉妹の列名の最尾に記されたる佐藤ひさ子、高橋れん子、兒島はま子、河原あさ子、(官報には「あさ」とあり、吾人の曩に得たる通信には「ひさ」とあり) 内田いし子、下田ふじ子、三井たか子これなり。此七人の婦人なるものは、廣島に未だ多くの看護婦の集り來るものなく、篤志看護婦未だ起らざるに先だちて率先韓地に在りて病傷兵看護の公務に奔走したる、最も感銘に堪へざるの烈女諸氏にして、今に當りて、吾人は此人々の美蹟を回顧するを禁ぜざるなり。

帝國の軍隊未だ韓境を越えず、韓政府の要求によりて、牙山成歡の淸兵を打つて、之を逐ふの時、多くの病傷兵を生じたるに當り、各地の野戰病院に於る負傷兵、病兵看護の、凡

て看護卒に一任しありしが爲に、往々患者の苦痛不便を感ずること多しと傳はるや、爰に仁川在留本邦人中、十人の篤志貴婦人即ち

佐藤ひさ子(居留民總代佐藤一學氏令室)。兒島はま子(仁川公立病院長兒島修吉氏令室)。高橋きん子(第一銀行仁川支店員高橋敬太郎氏令室)。河原ひさ子(仁川居留河原治平氏令室)。平梅よし子。平川つち子。三井たか子。内山いし子。田原すゑ子。下田ふド子(仁川居留下田龜太郎氏母堂)。

あり。以上婦人は皆仁川にありて、上流の地位にありて逸居平安の生活に在る人々なるにも拘らず、万難を排して、國難に赴かんと欲し、同心合意、大詔渙發の當日即ち廿七年八月一日を以て仁川日本領事を經て、病傷兵看護に從事するの志願書を、龍山屯在旅團本部に差出したり。然れども其志願聞き屆けられざりしを以て、推して二度の願書を呈出し、陸軍將校諸氏は遂に其義氣に感じて、旅團長大島少將は、八月十日を以て、彼十人の婦人中、有夫の七名即ち兒島、佐藤、高橋、河原、三井、内山、下田の諸氏を撰拔して、其願望を採用し、七氏は家事を擲ち、万難を覺悟して、同月廿四日汽船漢陽號を以て、龍山津に赴けり。其仁川港を出づるや、居留民等皆其行を壯として、之を阜頭に見送りたりといふ。

扨て七人の婦人諸氏は、龍山津に着してより、即日万里倉の兵站病院に入りて、三百名の病傷兵の看護に從事し、戰變何時に、脚下に起り來るべきやも圖られざる危難の地に臨んで巾幗の身を以て、經驗なき困苦の業務に從事したり。其義氣烈志は必ずや、本國に於て、多くの篤志婦人をして、公務に趨かしめたるの一大刺戟たりしならん。七婦人の此義擧に出づる時。第五師團兵站軍醫部長小池正直氏の之を石黒軍醫總監に報ずるや。總監は之を愛國の至情より出でたる義擧美事として、香川皇后宮太夫を經て、其姓名を、皇后陛下に啓進したり。

東京に廣島に、大阪に、仙臺に、松山に、其他各地の豫備病院に奉職したる看護婦諸氏や、其奉公義勇の烈志に於て、彼此甲乙なしと雖も、六百三十三人奉公の婦人中、其先登となり、木鐸となりて、最も危難困苦の實境に臨みたる、彼七氏義勇の婦人の芳名は、我國民正に最も重んじて、之を稱揚すべきものたり。而して官亦其芳志を空うせず、爰に此七女史を賞するに、第〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇十一等の賞典を以てす。

女學校の育兒科

女學校の普通科に、心理學、教育學などを別々に置かんよりは、育兒學の中にこめて實地の應用に調理し、其の具躰的の道理を活かし講ずることそ望ましけれ。婦女子は到底、育兒の天職を負はざるべからず、況してや是れ育兒には愛情の因縁深く、教育に無くてならぬ第一の刺激を與へらるゝをや。人をして自づから其の要理を悟り得せしむるものと云ふべし。心理も亦た斯の如し。既に心理學と云ひて、心の現象を要素に究め、之を單一にして論じ知らんとする時、かの子供の心を種として諸種の心象の起元、變化等を考ふるときは、瞭解するとも早やかるべし。左なきだに、普通科學課の特色として、應用具躰の方より觀測せんには、育兒の門より窺ふに及くことなからんとは思はるゝものを。

一家の仕方

一家の仕方整理に第一緊要なるは家内の和ぎ也。此の和ぎを所望する奥を詮ずれば、必竟、婦人の贊成協力を必要すと云ふ也。婦人一と度び意を決して其の仕方に贊同せば、用心堅固、注意周密、忍耐長久、苟しくも達せざれば休まず。男子の氣樂にして時々ぬかりのあると同日の談ならず。左れば經驗ある老翁の吾人に語りて曰へるは。もし他人の家政に相談をうけ、其仕方改革などを協議するときは、余は必らず御夫婦お二人にてお出下されと要むることをなしたり。乃ち、二人の眼前にて委細に相談し、これ〳〵云々の分度を嚴守し、何年にて斯々の調理を爲し了る豫算となさんと決し、シカと其の實行を約束するときは、夫人は之より一生懸命になりて眠る間も忘れず、たとひ夫の氣が弛みても承知せず、終始之を誡めて初一念を貫徹するもの也。余は幾度か此の實地に經驗して、婦女子の勢力の堅固なるに敬歎したりと申されしは、實に人情世態を玩味したる人の效とは思はれたり。

年頭禮儀廢る

或人慨歎して曰く、年頭の禮儀の今の如く衰へたるは、國家の耻辱なりと、則ち慨然として言く、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

元旦は神聖の日なり。先づ宮城を拜し、南山の壽を祝し奉つり、次に父母老祖人の健康を祝すべき日なり。然るに年內家を出でて近縣旅行に放浪するのみか、甚しきは之を新聞紙に廣告して恥とせざるものあり。元旦の趣意を辨ぜざるは勿論、情義に於ても不埒至極の事なり。西洋人がクリスマスを祝するとき、近縣旅行の廣告を爲すもの一人もなし。我國先代の風習にても決して斯の如きとはなかりし。圖鹵と不人情とを文明と言ふ筈もなけん。

去年中厄介になりし家には自から禮廻りをすべし。左なくとも封書の賀狀位は呈すべし。先輩に對しても同樣なり。然るに千人一樣のハがきを印刷し、目上にも朋輩にも目下にも只だ此の刷り物を送れば可なりとの調子は如何にも殺風景ならずや。中には、家內用の印刷したるハがキを利用し、何々の傍らに某方と注して己が姓名丈を記入し、而も目上の人にすら送るものあり、禮を思はざるも甚しい哉。

雪うづむ園の吳竹をれふして
ねぐらもさむるむら雀かな

評論

政治禪

如雲散士

『政敎別途』の語ありてより以來、世人動もすれば、文字に拘泥し、二者を離ちて一致しがたきものとなす。抑も誤まれり。

均しく是れ學問なれども、分てば之を專門諸學科となすべし。等しく是れ政治なれども、別てば之を八省諸官衙となすべし。もし如此き主旨によれる政敎別途を言はんには政敎豈に別途ならざらんや。

但だ夫れ運用施爲の根柢に就きて二者を別途となすと言はば之れ大いに誤まれり。單に其思想の誤まるのみにはあらず、近來政敎二界の大誤謬、大率此の不覺悟より生じ來る。

人或ひは曰く、政事は俗界の事なりと。俗と云ひ俗と云ふ、本來、法界に對するの稱呼に過ぎざりしに、今人の所謂る俗なるものは即ち之と異なる。抑も淺陋卑野を意味する俗界の

事として政治を目し、宗教を以て脫俗高遠の事となす。如此き別眼をもて二者を見るは、迂人の所爲なり。政治家にして其政治を見ると如此くば、其政治の陋なると知るべし。宗教家にして其宗教を見ると如此くば、其宗教の迂なると知るべし。宗教政治もと二つ乍ら救ひの爲めなり、之を俗界の爲めにするものと言はんには、二者同じに然り。之を脫俗高遠の思想より發起するものと言はんには、二者互ひに同じ。何んぞ其間に懸隔を置くべけんや。

試みに、宗教をもて論ぜんに、宗教もと政治と別途なるが如く思惟するの故に救濟の功徳あると游し。依らしむべし、知らしむ可らずとは、均しく是れ傳道の慈悲也。一切衆生をして安倚して悅樂せしめんに、愚夫愚婦とも稱せらるべき多衆の公輿が常識に滿足せしむると能はずば、何如で傳道の甲斐あらんや。機根に應じて善巧方便を用ふるは、慈悲心の愛ありて初めて能くすべし。乃ち是れ政治に於けるの秘密と同日の談にはあらずや。

更に甚だしきは、今の政士、自から卑しむの醜なるにあり。もし之と政道を談ずれば、彼等自から忸怩として恥づ、嗚呼これ大丈夫の事か。天下日光なきの地なし、人生、光明正大の氣象をもて爲しがたきの事業あらんや。忸怩として恥て避けんとするの士に、何の勇猛手腕をか望むべき。彼等自から其政治を輕んぜんに、人安んぞ之を重んぜんや。彼等先づ自から信ずるにあり、而して後ち輿衆をして信ぜしむるとを得ん。政治の要、民を安んずるにあり。然るに、政士先づ自から疑がひて而して他をして安んぜしめんとするも得んや。吾人の熱望する所の者は、政士深く其道を自信自重するにあり。蓋し思へ、政治を爲すの機根は、等しく亦た宗教心と同軆ならずや。

政士先づ大丈夫の悲心ありて、一切世俗の煩惱を憂ひとし、之を安んじ、之を新たにし、之を親しむの慈愛なくして、如何でか能く政機の大綱を提ぐるとを得ん。

政士先づ宗教的熱誠あり、身を以て國に獻牲し、赤心を開披して肝膽を瀝ぐにあらずば、多數の凡俗如何でか能く信賴せん。人往々にして曰く民は愚なり、大誠を知らずと。是れ人性の感應を辨まへざるの徒なり。一才の赤兒東西を辨ぜざるも倚よく慈愛を辨ず、人心の感交極めて微妙にして、最とも

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

速く精誠に感ずるは、響の聲に應ずるが如けん。政士先づ無想無念の妙地に悟入し、八面徹底の大無意識を成就せざれば、遂に能く億兆の意衷を洞察すると能はず。是れ此れ政士尤とも莫かる可らざるの修養にして、而して今の政士大抵之を顧みず。茫然として曰く、如此きは唯法界の事のみと。之を用ゐて政治に施すべきの緊急をすら、未だ感悟せざる人の多きは何事ぞや。

凡そ政黨は、政黨に超越する識見のあるありて而して能く利用すべし。溺れて喚喁し、其濁波以外に呼吸する能はずして如何で能く四方の大觀を得んや。一黨の士は是れ一黨の士なり、國家の士にあらざる也。未だ國家を達觀せず、亦何の日か天下の觀あらん。之ありと云ふも畢竟は偏偶の見たるを免れじ。

翻つて惟んみるに、古の大政士、其の樞機を宗敎によつて修養せざりしものは未だ曾て有らず。例を古今東西の實歴に鑑るものは、蓋し思ひ半ばに過ん。此をもて、政敎一致は古の大道なり、神政は即ち政治の極致なり。後世、其の形を襲ふて、其の弊を匾ぐ、こゝを以て時に改革なかる可らず。

改革の聲大にして則ち政敎別途の聲を反響し來るありと云ふも、單に之に惑はされて、忽ち分離を呼揚するは痴態にあらずや。政敎の外形は固より分離すべし、其の心機は必らずや一徹ならずんばある可らず。

惟ふに今の政士、外國の政躰に醉ふと三十年、只管ら其外形を摸せんとして遂に能はず。近來所爲、日に非にして忽ち頓悟する所あり、省ては勇猛の足らざるを思ひ、望みては前程の茫たるを恐れ、根本的改革の幾度か無効にして、自己の依然として昔日の我たるとに歎ずるともやあらん。嗚呼是れ政治禪の修養の將に始められんとすべき機會にあらずや。

茲に明治三十年を迎ふ、舊國既に去りて新國正に來るの觀あり。依然たる昔我を省みて吳下の阿蒙に恥ずや。政士もし蕊徹して振はずんば、蒼生の振はざるを如何んせん。余は、政治禪の大に修められて、明治三十年以後の政機の一轉せんとを祈禱す。

物おもふ袖にも月はやどりけり
にごらですめる水ならねども

今の武育

文武二にあらず、素と一道のみ。其の兩端を指さして暫く異名を賦すと云ふと雖ども、誤つて之を殊別のものとなさば、太だ不可なり。

左れど、二にあらざるの上より論ずれば、万法皆然り。昔に只だ文と武とに於て然か言はんや、一切の世相大率此言に逆ふとなけん。

故に玆に尋常の分科に循じ、通例の差別に依りて、試みに文武を二道となし、其の比對交助の上より着眼して、教育上の一論を爲さん。

夫れ、知行は合一せざる可らずと雖ども、知と行とは暫く二なり。西洋人、教育を論じて、智識と鍛錬との二つを別つもの、稍や之に類す。今夫れ、教育に文と武とを二別するとあらば、知と云ひ識と云ふは即ち文の事なり、行と云ひ鍛錬と云ふは即ち武の事なり。

此を以て、武と云ふは必ずしも、劍槍銃棒の謂ひにあらず。書に讀み、耳に聞き、目に映じたるの智識を鍛へ、之を心田に練入して、以て吾が身に體得するの修業を言ふ也。幕府封建の世にありては、生命を馬前に捧げ、殉死を枕頭に念ず。日として夜として吾が命を惜しまざるを以て赳々たる武夫の學問とは爲すが故に、即ち、所謂る武藝を以て鍛錬の『行』となし、仕合の中に決死を想像して、生命を惜しむの臆病心を刻々に裁斷したり。當時にありては、武藝を以て武道の鍛錬に科したるは、恰當の事なりき。

左れど、今の世は古の世に異なる。今の決死は古への決死に異なる。決死とは、其の覺悟に就きて言ふ。たとひ今日血を流し骨を晒らすとも、未だ直ちに今日の死を好くしたりとは言ふ能はざるべし。何となれば、時代の需むる所のもの、古へと異なれば也。

惟ふに、『行』の旨は實行なり。『鍛錬』の姿は實驗なり。今に際しての所謂る武育なるものは、各國相應の學科に於ける實行實驗を施すにある歟。之を女學にしては、女生をして女

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

學の實地に經驗せしむる也。農學に於ては其の實地に、商學に於ても亦其實地に經驗せしむる、是れ各科に於けるの武育にあらずや。

今や武育を言ふもの漸く多し、而して武育の精神を忘れんとするもの亦漸く多し。武育の精神を忘れたる武育は、寧ろ文に偏したる也、既に之を武育と云ふ可らざるものと知らずや。夫れ、武育の形骸に拘泥する餘弊は、所々に醜態を百出せんとす。これ眞に武育を重んずるもの丶最も慷歎する所にあらずや。武藝は衞生に害ありなど云ふは、無精神の馬鹿者にこそ言ふべけれ。吾人は此般の迂論に對して恐るゝにはあらず、只だ武育を崇拜して反つて其の精神を誤らんとするものの爲に恐る。

教育家其職を重んぜず

曲浦

教育界、人なきに非ず、博學多識の士は濟々として多く、而も教育學者のあまりに多きが故に、教育界は却て煩はしさに堪へざらんとする程に多きなり。經驗熟練の人乏しきに非ず、年功加俸を受くる者、數千百の夥しきあり。

維新以來、人材登用の道、盛んに開放せられてより、昔の士人の格を存するものらしく重んぜられて、官吏、教師、醫者の三職に向つて人士多く進む。此三者の職任なるものは、凡人の多く敬重する處なり。父兄の其子弟を教育する、官吏たらずんば、教師たり、教師たらずんば醫者たらんことを欲して、其弊實未だ全く覆へされず。田舍に行いて之を見る、村長に次ぎて重んぜらるゝは、學校の校長なり、また醫者なり、其中最も智慧學問に達したる學者は、即ち學校の先生なりと信ぜり。學校の教師とは、とりも直さず、學者といふとの代名詞なりと誤想すること、即ち教育界が多くの人士を領有するの自由開路を得て、而もまた教育界に人なきを嘆ぜしむるの因緣とこそなるなれ。

教育家たらんとは、多くの人の冀望する所にして、而して凡百の職業中、之となる極めて易く、由て人士多く並び進む。大學に、中學に、師範學校に、檢定試驗に、幾許の學藝と、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

多少の教育學との研究を積み、撿定を經れば、忽に麗々たる教育家の看板を掲げ來りて、子弟の育英、苦もなく成就すべしと思へり。如斯きが故に我邦の教育界、多士濟々たるを以て賑はへり。

教育界人なきに非ず。昔、ペスタロチー、フレエーベル等の未だ出世せざるや、歐洲の教育界には、多くの老朽兵士の廢物、衣食の道に窮乏して、教育者たるもの多かりしといへり。素より此種の輩は、與て云ふには足らざれども、此亞流の教育家、我邦また敢て乏しきを訴へず。官吏の廢物、破産子弟の飛び上りものにして、村學究先生の敬稱に悦喜するもの尠からず。而してかく人才俊士の寥々として進み來れる教育界に於て、其牛耳を執るものは、所謂教育學に精通すと稱する學者輩なり。彼等は多くの法則を編み、多くの學說を唱へ、我邦の教育界にヘルベルト、ライン、コンペレーの多き事、十數百人にして止まらず、或は國家主義を云ふものあり、或は世界主義を唱ふるものあり、開發教育といひ、五段教授法といひ、倫理問題に、體育問題に、小兒研究に、教育會議に、議論喧々、誰か教育界を以て賑はしからずとはいふ、誰か教育界人なしとはいふ。如斯に學說盛んに、如斯に人士多きに非らずや。其學說の賑しきより推すれば、教育界敢て萎靡振はざるにも非ず。其人才の多きより量れば、斯界敢て人なきを歎すべきにも非ず。

然りと雖も、吾人の教育界を以て萎靡振はずと稱するものは、其精神なき空論妄說の餘りに饒多にして、教育の大道興作せざるが故なり、教育學者の豐富なる事は、却て斯道興隆の一大障碍となれり。教育界人なきには非ず、たゞ此聖職に自重して、身命之に奉ずるの人、極めて乏しきなり。某曰く、吾に槓桿の置き場を與へよ、さらば吾、天下を動かさんと。教育家の天職には、此槓桿の置き場の供へられあるものを、之に手を着けて、後を顧みざるの教育家、今何處にかある、昔、イブルゾンの窮學究は、吾よく歐洲文明進步の車輪を一轉したりと信ず、而して彼は乾けるパンを、涙に潤して食したるの人なり、彼が貌にだに倣はんと欲するの教育家、今何處にかある。素より其人稀になきに非ず、然れども世は如斯き熱誠の教育家を疎んじて、狂と呼ばずんば愚となし、或はまた宗教的の山師と譏す。所謂教育學に明るき教育家も亦まか

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

いふ。彼等は眞誠教育家の爲に、三歩を讓りて其教を受くるには、餘りに傲慢にして、自ら教育界の藩閥を造りて、人の進路を壟斷す。彼等は教育の大道を重ずるものに非ずして、教育學説の堅白異同を爭ふを以て重しとなす。

學説の論議に齷齪するものはなほ容すべし。衣食の故を以て教育家たるを潛稱するは、甚だ容すべからず。人間もと衣食なき能はず、教育家たるもの、よく饒に其酬を受くるに當る。然れども、彼の自重確信は、其天職の上に在るべし。されど今時滔々たる教育家にして、よく衣食以外に卓峙して、其天賦に安んずるもの幾人かある。其職を見ることを輕しとし却て、衣食空名を見て重しとなし、よき儲け口あらば、破履の如くに、其聖職を委てゝ官吏ともなるべし、政治家ともなるべし、實業家ともなるべし、相場師ともならざるもの、果して幾許人ぞ。誘惑の多きは、粃糠を淘汰するの自然法なるべきも、いやしくも尊き事、教育の大任に於けるの去就を、しかく易々にすると、痛嘆せざるべけんや。宗教家一變して相場師となると惡むべしとすれば、教育家の相場師となるもまた恥づべきに非ずや。由來教育家と宗教家と、其職の尊嚴貴重なるとを一軌にす。然るに教育家の其職を見ると重からず、隨つて世人も亦之を其眞價に於て輕んじ、之を制裁する極めて寛なり。

今の教育界決して、教育學の不振を憂へず、教育學者は頻々として多し。たゞ最も缺乏せるものは、其天職を重んずるの教育家なり。教育學は以て其の教育家を輕重するの秤量たらず、斯道を重んずるの多少は、教育家の眞贋を分つ所以なり。冀くは今の教育家に向つて、其教育學を擲たしめて、斯道の尊重なると、其天職の高尚なるとを講ぜん歟。如斯くにして、教育界人なきの損耗を償ふの途を獲るに庶幾からん歟。吁、其職を重んぜざるは、現時教育家の弊なり、然るに世人の漸く彼等を待遇するに篤からんとして、其事や會々以て、無能褻職の教育家をして、永く其任を瀆さしむるの一誘惑たらざるに非ず、嘆ずべきかな。斯道重んぜられず、其職重んぜられずんば教育界の眞個の振作、興隆は、之を何の日にか待たんや。

立かへりなにはすが笠きても見ん
雪おもしろき淡路しま山

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

小楠に好弟子なし

海舟先生曰く、横井小楠には好弟子なし、弟子を持つには餘り大き過ぎたり、大抵の門弟子は皆な煙にまかれて、先生、何事を言はるゝにやと思ひしなるべし、大久保甲東すら、維新の時、小楠を聘して、後に人に語りて曰く、存外なりと、蓋し途方途轍もなき大經綸を言ふゆゑ、殆んど人は聞きて笑ふの外なかりし也云々。

哲僧祐天の恩師

祐天上人と云ふは檀通上人の弟子なり。檀通は其むかし三縁山増上寺の塔中、普光院の現住たり。故ありて一時白痴の如くなりし祐天を教育して、遂に天下著名の賢僧とはなしたり。祐天、痴性を脱却して聰明の氣初めて兆すや、神智の陽發熾く程にて、一日座上老僧と夢を論じて言下に言ひ伏せたり。檀通師、心に悦べども故と惰を冷やかにし、暫く之を挫きて驕慢の歩みを止めたるこそ、眞に人の師たるもの、慈悲なるべけれ。此時、檀通、嚴然として祐天を斥ぞけ、當分勘當す

と申渡して戒しめられたる様は、

佛門の義は武士の義と同じからず、一切の衆生を導びき共に成佛得脱せしむるをこそ及ばずとも金剛心とも云ふべし。一端の憤に取るに足らざる蒙昧の徒の詞に大切なる自己の佛心を忽まち皷笛せられ、憤怒、心頭より起り、其座席、時の便宜、品位長幼長者も構はず、人も死さぬ殺意不遜、座の興もさむるに至らすは覺悟なきと也。彼もと小人なれば、重ねて姦計など企だてなば、己が修羅鬪爭の死地に入るのみかは、人をも魔界へ誘引し、自他同前に惡を念ふ。さして苦にもならぬ假そめの風話を取上げ、一大事がましく自己の心を轉動せしより種々の悪事を呼出すなり。汝、下戸の大酒、書物と云ふ酒を痛飲して書物に呑れしなり、小智、菩提の妨、汝に倣ひて數多の徒弟博學能辯をよきとし、我慢放逸の邪路に落入るうろたへもの多かるべし。一殺多生の道理をもて勘當せしむるぞと。

仔細に玩味し來れば、眞師、徒弟に訓ふるの主旨、津々として湧き出づるを覺ゆ。

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

福翁、氣品と下品とを説く

福澤先生、馬場辰猪の墓前に涙を揮つて弔文を讀み、切りに故人が氣品の高潔なりしを贊惜す。後ち信州に遊んで田舍紳士の宴會に臨み、商人は須からく下品なるべしの意味を演ぶ。論者往々其矛盾を難ずるものあれども。抑も此の二様の言の同主意たることを知るもの少なし。夫れ自得者の發言は、二様にして而も一なり。評者の一概に論事矩を當はめんとすることそ恥かしけれ。

俗卑むは大俗なり

總じて學者の説は、自から高く標置して他を俗とするにあり。俗人又は俗物など〻云ひて人を輕侮することは往々耳にする處なれども、か〻る放言をなして自から高しと思ふ程、俗なるはなし。本來、學者が世に事業を爲すの精神は、俗を救ふにあり、即ち俗を重んじて之を愛憐することとこそすれ、これを輕侮するとなどは斷じてあるまじき義なり。又、學者の一癖として通俗の事を小さしと視て、之を輕んずるものあり。

然しながら、此の小き事が一般凡俗の人に取りての大事件たる以上は、即はち我も視て之を大事件となし、鄭重に扱かはざる可からず。然るに古來のすぐれ人が、反つて小事によりて失敗すと言はる〻事のあるは、此處の秘義を辨まへざるの故なり。諸君此の理想に於ては如何に小きことをなすとも、社會上には世人の大事と見做し救俗の主旨を行はるべし。又、救俗の事を行ふには、俗に混じ、俗を重んじて、之を馬鹿にせざるにあり。諸君もし自己の學びたるを頼みて、人を俗なりとして擯斥し、若しくは世人の視て大事となす「つまらぬ」事を、わが理想通りに益なき事なりと放言し去るやうの事あらば、余は寧ろ諸君を未だ學びずと言はん。

教育學の害

教育界もし教育學なるものなくんば、如何に幸なりけん、是あるが爲に、教育界には、幾多の障礙と蹉跌の石とを與へらる〻なり。少しく教育學を研究して、其實教育界に立つ丈の見識の量なきものが、一朝忽ち教育家たるを自稱し來るによりての、教育界の損失那計ぞや。よく教育の學理學説を喋々喃々するものは、教育家らしく重く見られて、其實彼等中教育家の聖職に位ひするものあると稀なり。よく教育學を論ずるとを知れるもの教育家ならんには、神學に明るきもの、之を宗

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

教家と稱すべきも、天下豈に此非理を容れんや。宗教家の品德は神學以外にあり、教育家の眞賞は教育學以外に存す。今の教育家は餘りによく教育學に通曉す、而して教育學に通曉する丈、それ丈、反比例を以て、教育家たるの重要素に欠けたり。今の教育家は、餘りに學理の論議に巧みなり、而して彼等に最も要する精神の鍛錬に欠ぐ。當世不可思議なるもの二、曰く、宗教家、神學を知りて、宗教を知らざる其一、教育家、教育學を知りて、教育を知らざる其二なり。

教育雜誌

今の教育界不振沮滯の一原因は、其餘りに多くの學者を有せるが爲めならずんばあらず、而して其教育家中にても、學者株の持物なるが故を以て、今の教育雜誌に見るに足るもの一としてあるをなし。教育雜誌のなす處を見るに、學說の論議術語の解釋、曰く國家主義、曰く倫理問題、而して歸する處皆是れ一片の空論妄說のみ。我多くの教育論に巧妙なるの文字あるを知る、然りと雖も未だ教育精神の眞諦を道破するの文字を見る事能はず。要するにこれ、眞に教育情に徹底する、の作者は隱れて、教育上の教育界同情に巧なる小人現るゝの故たらずんばあらず。彼等の精神熱誠なき教育論、よく何の功をか奏せんや、吾人は寧ろ之を聞くを欲せず。今の教育雜誌中、たゞ見るべきものは、區々眞相を誤りたる、誇張に失したる事も稀ならざる地方教育界の通信あるのみ。

帝國教育會、高等教育會議

客歳大日本教育會は帝國教育會と改稱す、又國家教育會は解散して、此帝國教育會に合併したり。於是乎、永らく其噂ありし、兩教育會の合同なるもの成りしなり。近衛公爵は此教育會を率ゐて、如何の事業を、今後の教育界に演ぜんとはするぞ、吾人乞ふ刮目して之を見ん。

また加藤弘之、谷干城氏等が昨年中切りに運動して、其設立を希望し、時の文相は、教育家政治に容喙すべからずとの題目訓令を執りて、之をしりぞけたるもの、また文相の更迭の結果か、文部の雅量の増長か、客歳高等教育會議なるもの設立せらる。然れども此會立ある時分には、民間の之を希望するもの、火の手は、全く打消えたるぞあさましき。之を歡迎するものは、いと稀に、時に心あるものは、こはまた無用の長物なりとはいふなり。幾何の事の高等教育會議によりて成就せらるべきか、そは一に當路の雅量と、會議員の勢力とによる。

北海道同志教育會

留太壽之氏等の發起にかゝる北海道同志教育會は、北海道北見國紋別郡、上勇別原野に於て、四百五万坪の貸下地を得て、之を學田と名づけ、有志の資本主、獨立移住者及小作人の三者によりて、之が開墾に從事し、之より收入すべき利益の幾分を以て、北海道に一大學を起さんとするの計畫あり、殆ど熟して、即ち本年よりして、其開墾に着手せんとす。其目的や頗る贊同すべく、また聞くが如くんば、勇別の學田、地味豐饒なりと。此一大事業、よく其功を奏して、北海道に一の完全なる獨立大學の起るの日あらんこと、希望の至りに堪へず。

米國の兒童研究

教育上種々の企をなすもの多しと雖ども、近來合衆國教育家の間に切に稱道せらるゝ「兒童研究」の如く、世の注意を引けるものはあらじ。これがため、イリノイ大學なるクローン博士の如きは、特に「兒童研究月報」なる一雜誌を發刊するまでに及び、又亞米利加に於ける兒童研究の主唱者とも崇むべきクラーク大學總長博士スタンレーホール氏が主幹たる「師範雜誌」の如きも、毎號其半ばは、この兒童研究に關する事項を以て充實せられ、九十三年以來、各州に散在する教育會は皆な思ひを之にこらして討議研究する所あり。中にも某々の六ヶ州は、殊に「兒童研究協會」なるものを起し各地方にある各種の協會及「母親會合ひ」などと氣脈を通じ、多くの父母は、其子女が發育の經過を記錄して、兒童研究に資する所あらんとするに至れり。聞く、矧川志賀重昂君の如きも、亦茲に志あり、已が愛子日々の動作を記錄に止めて「某日始て微笑す」と書するが如きをなし以て樂とせらると。

なほ合衆國にては、多くの大學亦之れがために意を注ぐもの、如く、師範科を設る大學にして兒童研究に骨折らざるもの殆んどあるなし。クラーク大學、シカゴ大學、レーランドスタンフォールド大學、カリフォルニヤ州立大學の如きをその最もなるものとす。殊にクラーク大學の如きは、其研究法の概略を印行して諸方に送りしが、之が結果としてその答案を得たること十五萬の上に出でたりと。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

而して兒童研究なるものは、たゞに教育學上必要のものたるのみならず、人類學社會學心理學倫理學博言學及神學の如きさへ、なほ且つ之れにより得ること大なるものなるを以て、コロムビヤ大學人類學教授ボーアス博士、北米の有名なる博言學者ヘール、ペンシルベニヤ大學なる經濟學者博士パッテン氏、ハーヴハールドの倫理教授ロイス氏、また實驗心理學の泰斗として其名高きエール大學のスクリプチュア博士、其他英國のサリー教授ガルトン男の如き、佛のブレ及ビ子兩氏、獨のプレエル氏の如きもまたこの新問題を鋭意研究せられ居るものゝ如し。

師範學校生徒をして、殊にこの兒童研究に思を寄せしむることの、頗る有益なるは、今日一般に認識せらるゝところにして、合衆國の各學校は大に之が奬勵に勉め居るといふ。蓋し、子女兒童を教育するの任あるものにして、兒童の性情を研究せんとするの念切ならば、常に其觀察眼を鋭くして、兒童が一言一行にも注意するに至り、兒童に對する同情の思ひ自ら深くせられ、教育の方法の如きも種々熟慮工夫せらるゝに至るべければなり。心理學にて學び得たる人間の性情の如きまた實際事に當りて之を驗するに非ずんば、學生の腦裡によく會得せらるゝものに非ず。されば、兒童研究により、是まで學び得たる教育心理の智識も、實に生きたるものとはなるなり。ミシシッピー河の西岸に位するウイノナ師範學校にては、シエパード氏之が校長となりこの兒童研究の法なるものを今や其學生に授け居れり一見するにその法頗る妙を得たるものにして、始めに先づ、心理學研究の際、學生をして己が幼時の希望幼年學校生涯に於ける思想等の、なほ今日に殘るものを文に作らしめ、兒童の性情に對する概畧の觀念を起さしむ。次にまた休業中その幼弟幼妹に就て觀察せるものを起草して教授の手元まで出さしむるなり。其後に至りて、始て實地教授の任に當らしめ、問答其他各種の方法により、教授の與へたる條項に關する觀察をなさしめ、以て兒童の如何なるものなるやを知悉せしむるにありといふ。我邦小學教師の間にも、此る難有き精神の早く浮び出でゝ、村長の御機嫌伺ひ白馬のケイ飲みに其身を陷るが如き、學校先生の地を拂ふに至らんを望むになん。

ジヨセフイン

雲の上にすまずなりてもよをてらす
かげはかはらぬかたわれの月

あつ子

大坂博愛社の教育

吾人が博愛社の名を聞くや實に明治二十二年を以て最初とす當時一律の教育に嫌焉たり、密かに四方を望みて播州龍野に近く一種異樣の團結あるを認ため、其の耕やし且つ學ぶ有爲の氣概に打れて遙かに同情を寄す。之より小橋勝之助君の名を知るに至りき。惟ふに吾が女學雜誌年來の讀者は、其頃よりして同もに博愛社の名を聞かれたるなるべし。二十七年勝之助君病んで死去せられたれど、弟氏實之助君あり、林歌子君あり、能く該社創立の精神を維持して毫末も弛めず。中頃大坂に居を轉じて、依然として社業を伸ぶ。其の教育上一種の特色は未曾て衰へず、藹然たる和氣長久に棚引くが如きぞ羨ましかる。茲に、去一年間の記事略を掲載し、該社晩近の狀形を示す。

記事

茲に明治廿九年を迎へ今や全員二十一名となれり爲めに住居狹隘となり教育上實業上衛生上其他萬端の上に於て是非一軒の家屋を要することゝなり一月以來只管主に熱求を始めたり三月十二日故社長の第二回紀念會を催せり五月九日社内に於て聯合婦人會を催せり來會者四十余名なりし六月六日社内に於て大阪婦人教役者會を催せり來會者廿余名なりし共に盛會なりし六月上旬參の收獲に着手せり中旬

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

稻作挿　を始む數日にして終たり廿七日昨年眠に就きし兵頭賴之の一週年を迎へ彼を追懷すると共に昨年の大試鍊今年の惠みを考へ一同感恩の情に溢れたり九月八日連日の大雨にて當地非常の出水諸川堤防決潰非常の慘狀を呈せり當村最近の中津川堤防も甚だ危急に迫り人心恟々家々家具を取片付け焦眉の急に日を送りしが幸にして決潰の難を免れ安堵の意をなし一同神恩を深く感謝せり十月廿一日より稻の刈入れに着手せり十一月廿五日收穫並に麥蒔きを悉皆終れり本年一月以來の祈禱に依り家屋建築費用として與へられし寄附金は三百有余圓となれり本年中新に救濟せし孤兒一名孤女一名外に教育を本社に托せられて預りし婦人一名本年は昨年の不作に物價騰貴の爲め經濟困難を來さんと兼て強き覺悟を有したりしが必需物を知り玉ふ全能の神は豐なる惠の下に小さき一群を養ひ玉ひてクリスマスには一同の羽織帶等を新調し溢るゝ感謝の内に本年を送れりクリスマス夜は昨年永眠に就きし井上愛信を追想し紀念をなせり

●教　育

本年中の教育は別に變りなし朝三十分聖書の講話をなし午前二時間半普通學科を授け夜一時間復習せしむ其餘は專ら實業に從事せしむ四月上旬學年試驗を行へり目下別科三人高等科六人尋常科八人なり

●衛　生

昨年は病魔の試鍊を受け一方ならぬ困難を極めしが本年は幸に一人も大病に罹ることもなく概して一同健全にして經過せしは實に感謝の外なし

●實　業

本年一月より六月に至る麥田の耕耘野菜物の栽培に從事せり六月麥を收穫し稻田挿　をなせり七、八、九、十月は專ら雜草除去灌水手入れに從事せり十月下旬より十一月に掛け收穫をなし且三反歩の麥蒔きをなせり其他農事の間隙を以て草履製をなせり本年草鞋打ち器械一組を新調し種々擴張をなせり米麥搗き雜業をなせり本年の稻作は挿秧後降雨頻繁なりしと剩さへ九月大洪水のため一方ならず害を蒙せり本年中收穫せし農作物左の如し

耕地六反歩　總收穫米高十石六斗一升
内　六石五斗　年貢(即ち小作料)
差引　四石一斗一升　收益外に
麥八石餘　菜種四斗　野菜物種々

●合　計　決　算

一ヶ年間　總收入高六百十四圓四十四錢三厘

内　譯

一金六十二圓三十四錢三厘　田畑收入　一金三百五十五圓十三錢　寄附收入
一金三十五圓七十七錢二厘　草鞋製造賃金收入　一金七十二圓　役員勞力收入
一金四十六圓　預り兒月俸　一金十三圓十九錢八厘　雜收入

全總支出高　六百〇四圓八十九錢七厘

内　譯

一金百九十圓〇二錢　米代　一金七十圓四十三錢九厘　麥代
一金七十五圓十一錢九厘　菜物代　一金二十圓六十四錢九厘　醬油代
一金三十六圓三十一錢八厘　薪炭油　一金六十一圓三十一錢七厘　被服費
一金四十五圓四十八錢一厘　器具　一金一圓五十八錢三厘　稅金
一金十八圓卅五錢八厘　教育費　一金七圓卅九錢八厘　醫藥
一金二十一圓七十七錢　獻金并に慈善費　一金六圓四十二錢　通信費
一金六圓二十五錢三厘　旅費及び運賃　一金十一圓　肥料代
一金三十三圓六十一錢三厘　雜費

差引殘金九圓五十四錢七厘

●家　政　部

○庖　廚

本年中　白米十八石九斗　一日平均五升三合　一人平均二合三夕
麥　十六石四合　一日平均四升四合　一人平均一合九夕合計　四合二夕
庖廚入費薪炭油込一日平均一圓〇六錢二厘　一人平均四錢七厘
一年中平均一人一ヶ月に對する費用二圓二十錢

○衣　服

本年中新調せし被服羽織十六枚絹入五枚帶十五筋　下駄四十五足　蒲團三枚本年中寄附せられし衣服二十枚蚊帳二張蒲團三枚小物百十八點外に「れる」四丈餘尺

○現　在　人　員

二十三名内孤兒十八名預り兒及び女子四名　役員二名　下婢壹名

◎博愛社家屋建築の告白

本社は故小橋勝之助の創立に係るものにして孤兒實業教育の爲めに盡瘁せんことを期し明治廿三年一月其郷里播州の地に設立せり明治廿六年三月に至り茲に主任小橋勝之助を失へり爲めに種々なる困難試鍊に遭遇せしが主の御指導に依り一切を擧ち當大坂の地に移れり爾來滿二ヶ年餘間同地兄弟の助に依り其構内を借り受

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

け假に居を占め今日迄に至れり今や小供は益々增加し教育上衞生上實業上其他萬端の上に於て是非一軒の家屋を得ざる可からざる時機に迫り只管主に熱求すること〻なれり冀くは大方有志の諸君幸に本社の爲めに祈り且つ之に對し義捐せられんことを希望の至りに堪へず

本年一月以來建築に對する寄附左の如し

一金二十五圓　大阪聖約翰教會婦人會
一金二十圓　大阪川口教會婦人會
一金一圓　大阪川口教會員下條トラヱ姉
一金二百五十五圓　監督マキム氏幷にミスプール氏
一金三十六圓　大阪ミスプール氏取次米國有志職工ヨリ
一金二十錢　大阪岡本駒四郎氏
一金五十圓　播州社員澤田オ二氏
一金五圓　奈良基督教會婦人會

合計三百七十二圓二十錢

大阪西成郡鷺洲村大仁

明治卅年一月　博　愛　社

雜錄

若松賤子の著譯　（小公子緒言）

櫻井鷗村

若松賤子君の邦文學に於けるや、夙に一家の名を成したりと雖も、君はもと自ら任じて、文田に筆耕せられしの人にはあらず、たゞ家政繁忙の餘隙に、又病弱蒲柳の軀を養ふの間暇に、物のすさびに、折々筆とられしのみなれども、なほ明治二十二年十月に成りたる處女作、『御向ふの離れ』以來、同廿九年一月に成りたる絕筆『おもひで』に至るまで、七八星霜の著譯は、其數四十有餘種の多きに上り、中には『小公子』『我宿の花』及『セイラ、クルーの話』の如き長篇あり。今君が著譯の種類を列錄するに左の如し。而して其中最も主なるものにては、

お向ふの離れ（處女作）　女學雜誌　第百八十二號　（明治廿二年十月）
すみれ　同　上　自第百八十三號至第百八十七號　（自明治二十二年十月至同年十一月）
忘れ形見　同　上　第百九十四號新年附錄　（明治二十三年一月）
　文藝倶樂部號外　閨秀小說　（明治二十八年十二月）
イナック、アーデン物語　同　上　自第百九十五號至第二百二號　（自明治二十三年一月至同年三月）
小公子　同　上　自第二百二十七號至第二百九十九號　（自明治二十三年八月至同二十五年一月）
我宿の花（第八回迄以下斷編）　同　上　自第三百十號至第三百三十七號　（自明治二十五年三月至同二十六年二月）
人さま〴〵　同　上　甲第三百二十一號及同第三百卅六號　（明治二十五年六月、八月）
雛嫁　國民の友　第百六十三號夏期附錄　（明治二十五年八月）
ローレンス　女學雜誌　自甲第三百三十六號至同第三百四十一號　（自明治廿六年一月至同年三月）
セイラ、クルーの話　少年園　自第百十七號至第百卅二號　（自明治二十六年至同廿七年四月）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ストウ女史小說中一節　大學に入らんとして伯父を訪ふ　評論　第十三號　（明治二十六年九月）

祝ひ歌　女學雜誌　自第三百五十三號至第三百六十號　（自明治二十六年九月至同年十二月）

波のまに〳〵　評論　第十七號及第十九號　（明治二十六年十一月十二月）

おもひで（絕筆）　少年世界　第二卷第一號及同第三號　（明治二十九年一月二月）

とあり。此他なほ小品、隨筆、こどもの話の類には

閨秀小說家の答の中（女學雜誌第二百七號○明治二十三年四月）◎ひろひ兒（同上自第三百三十八號至第三百四十號○明治二十六年二月、三月）◎田舍だより（評論第一號○明治二十六年四月）◎林のぬし（女學雜誌第三百四十一號及第三百四十二號○明治二十六年四月）◎黃金機會（同上自第三百四十三號至第三百四十八號○自明治二十六年四月至同年七月）◎五才の本質（同上第三百四十號○明治二十六年五月）◎子供に付て（同上自第三百四十四號至第三百四十八號○自明治二十六年五月至同年七月）◎鼻で餅を釣った話（同上第三百四十六號○明治二十六年六月）◎小言のいひ様（同上第三百四十七號○明治二十六年六月）◎三階に御住ひなされまし（同上）◎アンセルモ物語（同上第三百四十九號及第三百五十號○明治二十六年七月、八月）◎新聞の新聞（同上第三百五十號○明治二十六年八月）◎犬つくをどり（同上第三百五十一號及第三百五十二號○明治二十六年八月、九月）◎主婦の精神過勞（同上第三百五十五號○明治二十六年十月）◎病める母と二歲の小倅（同上第三百六十五號○明治二十七年二月）◎砂糖のかくしどこ（同上第三百六十六號○明治二十七年二月）◎海底電信の話（同上第三百六十七號○明治二十七年二月）◎老たる象の話（同上第三百六十八號○明治二十七年二月）◎女學生の負債（同上第三百六十九號○明治二十七年三月）◎たんぽゝ（同上第三百七十一號○明治二十七年三月）◎鳥のはなし（同上第三百七十三號○明治二十七年三月）◎主婦となりし女學生の經驗（同上自第三百七十三號至第三百七十九號○自明治二十七年三月至同年五月●太陽第二卷第四號及同卷第五號○明治二十九年二月、）◎婦人の生存競爭（女學雜誌第三百八十六號○明治二十七年六月）◎邪推深き後家（同上第三百七十五號及第三百七十八號○明治二十七年四月、五月）◎水銀のはなし（同上第三百八十一號○明治二十七年五月）◎榮公の誕生日（同上第三百八十五號○明治二十七年六月）◎淋しき岩の話（同上第三百八十八號及第三百九十號○明治二十七年七月）◎勇士最後の手紙（上）（同上第三百九十四號○明治二十七年九月）◎盗物のなる木（少年世界第一卷第十八號○明治二十八年九月）◎猫德（同上第一卷第十九號○明治二十八年十月）◎玉とお染ちゃん（同上第一卷第二十號、第二十號○明治二十八年十月、十一月）◎三ツ苑（同上第一卷第二十二號○明治二十八年十一月）◎女房演說（太陽第二卷第一號○明治二十九年一月）

あり。以上表記する處を通覽するに、君の筆鋒は時々宿痾增進の爲めに防遏せられしにも拘らず、頗る勵精なりしと稱すべき歟。其明治二十七年下半期より翌年に亘りて、作品の甚だ尠き所以は、二豎の來襲もさることながら、また多くは女學雜誌紙面の變更を來せしが爲めなり、然れども此歲月は、君が、『ジャパン、エヴァンゼリスト』婦人欄及小兒欄の主筆として、英文の述作に、最も勉められしの時なりとす。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

世人君の文學を稱するや、必ず先ず、『忘れ形見』及『小公子』を擧ぐ。然り、君の著譯に於て推言すべきもの、啻に此二種に止まらずと雖も、『小公子』は正に最も美しく、君が文學を代表せるものと謂ひつべきなり。『小公子』は素是れ米國女流小說家の泰斗、フランセス、ホヂソン、バルネット夫人(Mrs. Frances Hodgson Burnett)の傑作リツトル、ロード、フオントルロイ (Little Lord Fountleroy) を飜譯せられしものにして、その成りしは、明治二十三年より、同二十五年に亘るの間に在りしと、前表の示すが如し。尙ほ詳にいへば、二十三年八月に、初めて其譯稿を起されてより、同年十月には既に其第四回の前半にまで譯し及ばれしが。頃しも君はいたく病痾の惱ます處となりて、全く文筆を廢すると殆ど半歲時。越えて二十四年五月に至り、病稍や愈るに迨んで、再び第四回後半よりの續稿を起されき。爾來幸にして、些少の滯りもなく、二十五年一月に至り、遂に此譯述は大成せられぬ。然るに二十四年十一月に於ては、其第一回より第六回までに君自ら再校訂正を加へられ、一冊の書籍となして、女學雜誌社の之を出版したることは、世上の熟知せる處なり。

此『小公子』前篇の出版によりて、君の受けられし江湖の好評贊辭こそは、洵に若松賤子てふ雅名をして、文壇に重からしめたるものなりけれ。讀書社會はまた此書後篇の一冊子をなして、世に公にせられんことを俟望しつゝありて、君の篋底はまた實に其校訂の勞を積まれたる原稿を有したりき。由來君の文を綴せらるゝや、其邦文なると英文なるとを問はず興趣一たび催し來れば、千百の文字を成すと、たゞ咄嗟の間に在りて、意に於て淹留する處なく、筆に於て澁滯する處なし。されば其飜譯の如きは、往々にして案外の誤謬を殘すことあり。故に其『小公子』を再校せらるゝに當りても、自ら屢、何が故にか、かくも顯證の誤謬をなしたることかと歎かられたりき。されば彼の既に篋底に收めたるものこそは、完全無疵なる『小公子』後篇の原稿として、いつかは世に出づべかりしに、悲哉、今年二月五日の災の君が家財を擧げて烏有に歸せしめたる際、之も亦灰燼となれり。其後日ならずして君亦俄に簀を易へられしかば、人々其長逝を惜んで、又『小公子』後篇の訂正出版は、遂に見るべからざるかを憂ふ、されど今また如何ともする能はず。よりて或は君が志を滿

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

たすと能はざるべきも、かの女學雜誌上既載のものを取り、聊か魯魚焉馬の誤を訂して、之を前篇に合せ、通じて一冊の完本となしつ、故若松賤子君遺稿の第一卷として、爰に之を上梓公版す。

賤子君が和漢文學上の素養の、また決して淺きに非らざりしとは、其文字のよく之を證すと雖も、君は特に英文學に精通せられて、こは正しく君が第二の國語の狀ありけり。新聞を讀まるゝにも、其英文なるは、其邦文なるよりも勞少しとは予の屢々親しく耳にせし處なりき。また新辭、寐語、且面目の談話及心籠めたる書翰などは、いづれも英語を用ゐられたる方多かりしとぞ。されば高雅純潔なる君が邦文學の、其宗旨に任ふ處あるは素よりの事、特に其英文學に胚胎せると最も多かりしは今更いふを俟たざるなり。故に其英文の如きも頗る圓熟自然の域に達せるの稱ありて、著作ありしものも亦尠しとせず。『巖本嘉志子』と名づくる英文集は、君が遺文廿一篇を收め、之に君が師ブース氏及其他内外知友記する處の君が贊傳を加へて發に出版せられ、之をば君が在世の紀念として、其夫巖本善治君は、之を日本帝國基督教主義女子教育の進歩の為に捧呈せらる。

某子に與ふるの書

青柳有美

空の鳥に巣あり、狐また穴あらば、人如何でか風浪の間に漂ひ、長く身を安ずる處なくして忍ぶべけむ。家庭亂は人の長久に耐ふべからざるものなり、玆に於て、室家の不平兒は、往々にして或は酒に隱れ、或は戀の勇者となる、この戀斷たれ、この酒奪はるれば、彼れ生命なきに等し。御身が、名利の外殆んど一物なき人々に、婚嫁を迫まらるゝこと愈々急にして、去かも彼の君の德を思ひ、其智を慕ひ其熱愛に溫められんを欲するの情益々切なるもの、蓋しこの故ならんかな。如かず、家に死し戀に生れ、而して又戀に死せんには。戀は笑事に非ず、アルフハなりオメガなり、始なり終なり。正にこれに殉するの覺意なかるべからず。この心天地に通ずべく以て人を動かすに足る。飢餓も患難も危險も、迫害も裸體も困苦も刀劍も、之に勝つべからず、上長の威嚴を以てして尙ほ遂に讓らざるを得さるの期到らん。それ眞摯熱情の迸る

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

所には、魍魎必ず其影を隱くす。然れども思へ。世に戀の假象なるものあり、夏日エヂプトの砂海に現はるゝといふミレーヂユの如く、巧に人目を眩して、之を誘ひ導き、遂に失望の谷に陷れて、多恨多淚の一生を送るに至らしむ。これぞ、惡鬼の係索にやあるらむ。されど多くの人、未だ眞の戀に達する能はずして、その假象に盲せらるゝ。憐むべきは、此種の儕輩なるかな。昔日の情郎情婦、一朝にして琴瑟相調はず、破鏡の悲運に至る、蓋しこれがためなり。今日相愛し、相慕ふがごとかりしもの、明日相反目し相疎んずるに至る、またこの理りに出でず。然らば何をか戀愛の假象といふ。

俗に所謂虫好きのせぬ人、相性なるものあり、此種の男女は互に相會するも、別に何等の現象なし、若しこれありとせば、たゞ嫌厭の情ならんのみ。然れども、青年妙齡の男女一たび相會し相見れば、多くは必ず、一種美妙の快感にうたれ、共に相別れ相去るに忍びがたきの思ひある、是れ普通の情なるらん。未だ年若くして、人性を達觀せざるの徒、之を以て眞の戀なりと誤り認め、輕擧ことを過つあるを覺らず、漫に婚嫁を急いで偕老同穴のまじらひを實にせんことを希ふ。眞に至愚の極みなり。されど、これ多くは、眞の戀にあらで、生理的現象なりとは知らずや。生理的現象は、朝に出でゝ夕に消えなんとする糸遊の如く、出でゝは消え、消ては又出づる戀の假象なり、故に長久に續く能はず。何處如何なる人に遇ふも、蕾まさに相發し相開かんとするの時、必ず相生ずるものなり。何ぞ特に郎君を煩し、何ぞ殊更に意中の人たるを待たんや。然るに、その然る所因を覺らざるもの、蓋しその初心にして世故に習はざるが故のみ。純潔垢汚なきの青雲兒、途中にしてこのミレーヂユに消えうせられ、霹靂一聲、夢醒めたるが如きものあり、天の一方を睨んで、悲歎に其身をやつすあらば、實に以て上なきの恨事なれ。君乞ふ心して、戀の假象に欺かれあらざるを致せ。

西鶴がいひけん人は移氣なるものぞかしとは、千古磨せざるの語ならんかし。今日かの人を思ふの心、明日また如何に移りゆくべき豫め計り知るべからず。人は以外にづるくして、しかも、横着なるものぞ。かの君の、我を愛し給ふの心とて亦同じ、他に增す花のありて、其目をひかずとは限られまじ。變り易きは、秋の空と男の心、はた又女の心のみに限らで、こ

れ即ち人の通性なり。故に一二年も互に相待ちて、變らじ、變ることなしと見屆けなば、始めて相合ふをよしとす。眞の戀とは一二年の後ならでは出で來らぬものぞ。然らずして、苟の働もあらば、後日臍を噬むの悔みあるらん。されば、極力親戚家中の勸誘に、反對の意向を表するの前、先づ我がうちに横はるもの丶果して戀の假象に非るか、またその變ることなきものなるかを確め、以て己が立場を据ゑさるべからず。このことにして定まらば、死力を盡くして假ふ素より可なり。否な、かくあらずんば、これ却て貞なきなり。故障の威力に辟易して、其情人を棄るが如きは、これ敵の勝ち難きに懼れて甲を脱ぐの怯者に等しといふべけれ[illegible]

人今や細君が良人に及ぼす感力の、頗る著きものあるを説けど、その却て良人の性情感化の、細君に及ぼすの更に多きを忘れたるもの丶如し。儒夫匹夫を導いて聖賢の列に入れしむるや頗る難し。されど牛にひかれて善光寺に詣る牧者の如く、自ら其品性を墮落して夫の惡に傚ふに至るや易々たるのみ。現に某女學校の卒業生にして、才德の聞れ高かりし某女史の如きも、今や既に嫁して長煙管に長火鉢を叩いて、縮言を交ふるに巧みなりとか聞く。婚嫁のこと豈に恐れざるべけんや。是れ實に婦人が或は天に上り或は陰府に入るの要門なり。御身の財婚を迫まられて、之を拒み眞の知己に合はんとせらる丶やよし。されどたゞ大に戒むる所なかるべからざるをいふのみ。

また德と不德との別る丶所は、たゞ一薄膜あるのみ。之を破る難きが如くにして、しかも頗る易し。人や以外に血肉の熖盛に、以外にその意志弱きものなれば、ま丶之を破りて不德の淵を翔るに至る。われ御身が德の高くして潔清なるを知る。されど戀の假象は人を導いて思はざるの邪路に入らしむるものなり。不平見に於て殊に然りとなす。是に於て、情交の間、禮義を重んずること嚴ならざるべからず。禮儀は乃ちこれその貴き薄膜とも見るべし。このことや、既に我が先輩の言ひし所ならむめれど、敢て之を再びして、御身の坐右に勸むと云爾。

髮を結ふ手の隙あけて巨燵かな
折々の日のあし跡や冬のむめ
葉も蕊も一つ寒や雪の花

轉變（小說）

おうそむ

（上）

いつもの若人の御出でとか、さあ此方へお通し申したがよい。大寒の節に入つた所爲で、此頃はめツきり御寒うなりました。それに昨夜からの大雪で、今少し血氣のある時分だと、墨田堤へでも、一瓢腰にぶら〳〵と、雪見とでも出かける處ですが、お弔事の事ではあるし、それにかう年が寄つては、仲々左樣な元氣も出ませぬ。炬燵にかうやつて縮こまつてゐるが、一番と結構なやうでは、老物もいやはや駄目ですな。此處がどうしても離れられませぬで、失禮いたします。君もさあ足を入れたまへ、なんと今日はゆつくりとくつろいで、話し暮さうぢやありませんか。此天氣ぢや、好な植木もいぢられませぬので、誰かよい話相手もと思ふて居ました處、例の碁客もやつて來ず、仕方がなしに、此通り蟲喰本をひッくり返して、眼鏡の厄介になつてゐました。ようぞ御訪ひ被下れた。浮世に老いさらばひて、六十餘年、此世に生きてゐる甲斐もない程に、物の哀れに嘆きの數を積みながら、はや爰に四十年計りも過しました。君のやうな、今時の血氣熾んな、日進の學問を勉强された若人に、此老人のとりとめもなき繰言が、なんの面白い事のありませうぞ。兎角年を取つては、氣も性急になり、利口がつて喋り散したり、時たまには無禮な擧動をしながら、耻かしいとも思はず、この通り皺くちやになつた顏の赤らなつたことは、もの丶十年もない位のもの、それに何處かに矢張り懷しいふしでも御坐つてか、ようぞ親切に訪ねて來て下さる。此親爺も君に逢ふのが、此日頃嬉しくて、埒もない戲言を聞いて貰ふ時には、頭に髮が生え戻つて、髯が黑うなつて、皺が延びて、若返りのした氣の致す折もあります。若い時分から、さう學問とて、せなんだ親爺、學問にかけては、小學校の子供にでも馬鹿にされるが仕方もない。ずん〳〵世の中が開化になつて、日々新しき學問が始まるとやら、ちと噂をもして聞かせて下さい、さぞ面白い事のありませう。今一返二十代の男になつて見たいものでさ。老人はもう駄目です、お祖父さんの頭は光つてゐても、電氣燈といふものが、どうして出來るか、お知りでないでしやうなど丶、孫奴までが相手にいたします。尤もですとも、其方にかけち

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

や、老人は盲目も同じ事、役に立ちません、若い者に馬鹿にされても、仕方がありませぬ。齢の四十も若けりや、今時の人に、なか／＼負ける男ぢやないですが、四十の事をいつて、一年も半年も、なんで若返りの出來やう、禿けた頭に髮の生えやう筈もない、いくら齒切りをしても、ずッとすッ込んでゐて、墓場へ婿入の白裝束着るのを俟つて居るより外にや、仕樣も御坐らぬ。

たゞしかし。取つた年は年、龜の甲より年の功で、髮の毛一本も生いてゐない、藥鑵頭でも、之を叩いたら、たまにや、若い者の急やそつとには勉强の出來ない、いくら書物と首ッ引きした處が分らない、實地の學問や智慧の音が致さぬでもない。また老人の耻知らずが、いつもの癖の自慢かと、いはれやうが、なに決して自慢では御坐らぬ。今時の學問をしたエライ人といふもの丶、やる事が、いくら學問のないわしにでも馬鹿氣に見えてならぬ事が多い。して見ると學問といつても、書物ばかし澤山讀んだ丈では、役にも立たぬものですな。兎角經驗が第一です。されば此親爺でも万更棄てたもの ではない。ちとこの禿頭の中から、經驗話でも引き出して、若い者に敎へて進ぜいではと、自分獨りで己惚れる時もある。御若いにいつも／＼訪ねて下されて、繰言を辛抱して聞いて下さるといふもつまらぬ乍ら、其邊の經驗をお聞きなされたいといふのでしやう。しかしわしのやうなつまらぬ話でも、さうやつて感心して聞いて被下さると、また却て耻しい。此親爺も、若い時分によく學問をして、經驗をして置いたなら、今頃は御爲めに充分なる話も出來ましたらう。處がわしの若い時分は、丁度御一新の前後で、世の中が騷がしくて、及ばずながら東西にも奔走して見たり、其中また不圖した出來事から、非常に心を痛めて、一時は世の中が厭になり、生き甲斐の程に果なんで、後にこそ悟りの眼が開けて、つまらぬ考へは棄たもの丶、今の家を起すが爲めの、とさくさ中に、年が寄つて仕舞つたのです。

今日はなんだか氣が浮き／＼して、興に乘つて來ました。例の酒めかしい、堅くろしい話をよして、ちと艶氣のある話を致しませうか。だが其方にかけても、今の若い人は中々とやつて御出でたから、老人が若い昔の艶めいた話なんぞは、面白くもありますまい。なに決して道樂して、身持ちを崩した、

たはれ氣たみだりがはしい話では御坐らぬ。滅多に人に話した事もなし、其事柄を知つてゐる友達も、今では皆故人になつて仕舞ひました。實は小說めいた事柄で、君ですから其話をして、昔を思ひ出しませう、君も哀れと思ふて下さる節も御坐らう。御承知でしやうが、わしも此年になるが、一度も妻といふもの持つたことがなし、當主といふも、實は親族ののを貰ひ受けて、養子に致し、家の事やら、わしの老後やらを見て貰つてゐる譯です。一生箸の上げ下げまでも、親切に氣付けて與る程の妻の味は、わしは一向に知らなんだが、それでも淋しいとも思はず、不自由とも思はず、その譯は、かういへば、妙に理屈を涅ねるやうですが、其實、わしが心の中には、美しいとも、醜いとも、どの樣な形をも忘てはゐないが、れつきとした一人の妻が、今も居るので、いつも慰められてをるのです。さういつた切りでは分らぬ、さあ其處に、此老人が、一生涯中出逢ふた悲慘な出來事の中での、最も悲慘な話があるのでして、其事程、わしが心を痛たものは、是迄外にはないのです。

今では剃らずとこぼつ、髮なしの坊主頭に、なつて仕舞つた

が、四十何年といふ年月、清淨無垢で暮し、たはけた事は、夢にも知らず、昨日も今日も今道心の氣で過したのです。さういへば可笑しいが、此親爺でも、一遍は君のやうに、髮の毛は漆よりも黑う、紅顏とかいはれる、一ッぱしの美少年でして、浮氣な娘共の、氣を惱ました事のないでもない。去かし、わしも元は由緖ある浪人の子で、お袋といふが、至極情の深い、義理堅い、行狀のまことに正しい、其時分には珍しい學問の出來た方でしたから、日頃正しく躾けられた所爲で、なまめいた事は、露思はず、惡酒の呑み方なぞは、耳にいれたこともなし、友人が誘ふても北の方へは、爪先だも向けた事もなかつたのでした。それに惡所で、遣ふやうな金の餘裕などは少しもなく、父親は手習の師匠をし、母親は裁縫や、歌の師匠をして、漸く其日を暮してゐたので、わしも其事を見てゐては、どうにも身持ちは崩されもせず少しは學問、武藝にも凝つてゐて、まさかさうでもなかつたが、近處合壁で孝行息子の評判を立てゝ與れたのでした。友達仲間では、品行の優れた、智慧のある男だと、幾分かは、尊敬もして與れたし、自分にも多少志望をば有つてゐて、碌々として、世を送

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

るとは、毛頭いやであつて、いつかは一度青雲に乗じてと思ふてゐたから、年頃になつて婿養子に與れろの、娘をやらうのと、いふたものもないではなかつたが、我志の程を知らぬもの丶言ひ事、なにをいふかと、昔て耳にも留めなかつたのでしたに、枯木にも花がさくとのあるもの、まして血氣熾んの若氣、時に逢ひてか、心の花の不圖開きそめて、笑ふて被下るな、わしも昔は人を戀したことがあります、而もいたましい戀の成り行をしました。またそれが、その以來四十餘年の孤獨の生涯に、心を修め、德を錬り、有爲轉變の世の中、艱難辛苦の理にも、こよなき慰めを得るの因縁となつたのでした。其因縁から、わしの樣なものでも、多少世の中に事業をなし、人物を磨くことが出來たのでした。

隨感

○新年を馬鹿にす可らず

行く水に寸尺を畫きて等々段々を劃らんとするは愚しき業なるべし。邊際なきタイム（時）と云ふものに筋目をつけて、此を今年と云ひ、彼を去年と云はんは、幼稚の戲むれにも似たらんが、人間もと幼稚にして、惣べて戲むる丶が如き現世に於ては、歳華暦日の區別は一大事のうちなるべし。緻密に論ずれば、年の別れ路の何處にあるを知らず、睡不睡の界に陰陽を振り分けて、一歩の後先に鬼と福とを區別す。觀ずれば馬鹿々々しけれど、觀ぜざる人の多き世の中に觀ぜんとすれば、一と先づ大槪仔細に分別せずんばある可らず。節季と云ふ方に執心しては、勘定の仕切にとぼ〳〵しながら、年始と云ふ方に景氣もちては、極々早朝に名刺を投ず。其の間、一刻の差ひなきに、心の思ひに千里の別あり。人間もと橫着を嫌ふにやあるらん、殊勝にも一年一年と區切りを立て丶、昔て、のんべんたらりとするとなし。此故に、凡俗社會に念ひを掛けて、人心の機轉の微妙なるに注意せんほどのものは、凡そ年の移り目なるものに、愼重の用意を寓せずんばある可らず。人の盛衰、家の興廢は固より、壽命の長短病氣の輕重など、此の新年に入るてふ一機轉の故をもて、存外の影響を引起すべし。左れば、去年と今年との相違を一日の移り變

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

りと看過し去るなどは、悟れるに似て實は悟らざるもの也。昏年去つて新年の來ると同に、人心の感應に一大變化あらん。屠蘇一杯の機嫌は忽ち醒むべくとも、年の過たるは反しがたし。半悟の士、あまり新年を馬鹿にす可からず。

○老人を馬鹿にす可らず

シェクスピアの院本に涙を落し、近松の淨瑠璃に胸を打たん間は、古老先輩の經驗譚を輕んずる莫れ。人情は千古東西に相同じきことを知ればなり。夏に夏衣をつけ、冬に冬着を着て而も、色合、筋紋樣に千差万別を裝へども、之を着すべき人の身躰に相違はある可らず。尤も、三尺の童子、五尺の丈夫となりて、丈は伸るが如けれど、躰の大躰に於て相違あるを見ず。人情の異同黑白を考ふるに、其理亦た斯の如き乎。其の裝ひと、其の流行り形に至る迄、寸分の變化なしとは云はず。凡そ其の大躰につきて悟らんには、万古千代、遂に變りなきを見ん。滔々たる才士、帋に臨み、活字に溺れて、眼前に其の師あるを念はず。幾度か無用の失敗を重ねて、而も自から覺らず。古老先輩が其の髮の毛を白くする迄に至りし慘澹たる經歷を利用せざるぞ憾みなる。灌木は年々に枯て曾て成大せず、亭々たる喬木の能く蓄積せる所を用ふるの理を知らば、青年子亦あまり老人を馬鹿にすべからず。

○馬鹿らしき人を馬鹿にす可らず

余が失策の一ツは、馬鹿らしき顏をせし人を馬鹿にせしとにあり。多少の經驗に鑑みて、つく〴〵と念ふに、馬鹿氣たる顏をせる人に非常の智者あることそ恐ろしけれ。固より神采を洞察して、無形の相を鑑定するほどの伎倆に達しなば、此の誤りもなかるべけんに、唯だ一と通りの人相風采に由つて判斷せし比ほひや、遂に斯る失策に陷らざるを得ざりし也。惣じて、人を馬鹿にするは宜しからぬとながら、吾か馬鹿なる間は兎角に此の弊を免れがたし。凛々堂々たる御方には、誰しも用心すべし、かの馬鹿らしく見ゆるほどに人を眼中に措かぬ人こそ最も恐ろしけれ。

○製氷家中川翁

中川嘉兵衛翁は、我國近代の製氷家の率先者なり。近頃、永

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

眠せらる。人歎惜せざるなし。其の慈善に預り、其の侠助に救はれし人は申すに及ばず、無情冷淡なりと人の思ひし、彼の氷に至る迄、さこそ歎くべけれと想はるる由あり。翁かつて歎じて曰く、余が初めて氷を製造販賣したるは衛生の爲なりしに、今は反つて衛生を害するものとならんとす。そを如何と言ふに、初め西洋人が貯蔵の用に氷を賞すとの夥しきを聞き、もし之あらば夏日炎天にも腐敗を止むること多かるべしと思ひ、扨こそ其の製造を發企したるなれ。左るに、今の人の之を用ふるは決して然らず、反つて飲用に供して歯牙を害し、腸胃を傷ふ。寧ろ衛生の敵となれりと。博愛義侠なる翁の精神を以てしては、さこそ此邊に遺憾なるめれ。

○文の辭に讀まず、相に讀む

或人、文章の讀みがたきを論じ、卑しみて曰く、嗚呼、何ぞ文と人との相違ふ斯の如く甚しきや。慷慨淋漓の文辭を見て之に感激し、髣髴、其姿を念じ慕ひて、其人に接すれば、存外の小丈夫なるともあり。高潔純粹の文辭を見て之に恍惚とし、如何に氣高き品格の人にてやおはすと行て見れば、野卑にして不快の情に堪へぬもあり。如何なれば、文と人との相違ふ斯の如く甚しきやと。余、慰めて曰く、何ぞ只文事をのみ然りとせん、人間の作す所、惣て皆然らずや。世人往々言行一致といへど、言行は素と不一致のもの也。心小にして神經過敏なる者は、かの磊々落々を好き、自ら多少の鍛練を爲すが故に、言ふ所に磊々落々の文字多し。其磊落を言ふ所以は即ち磊落を慕ふ所以、磊落を慕ふ所以は即ち自己の欠乏を感覺意識せる所以ならずや。言行、思文の關係、凡て此一例をもて判ずべし。此故に、世故に經驗ある者は、容易く人の言語を信ずるとなし、左れど亦た之を輕んずるにも疑ふにもあらず、由て以て其の眞相を察するの料となす。實行に於ても亦斯の如し。其の行ふ所以は、即ち注意する所以、注意する所以は、反つて本懷なきとを見めす所以にあらずや。故に、人を見るは、相に於てす、形に於てせず。もし能く文辭の間に現る丶無意識的の相に觀すれば、人焉んぞ廋さんや。世人未だ文に於て人を見るの道に學ばず、直に其文を信ぜんとす、此を以て誤る耳。

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

時文

○新小說　第二卷第一號

新小說の初刷は、諸大家の作を集めて、勢よくも打ち出したり。いでく諸大家先生が御手並を拜見の上、一口な申上げんに、

紅葉山人の『アンチヘプリン』未だ完結に至らぬが故に、何とも評し樣はなきが、例によりて輕妙。

坪內逍遙の『心の解剖』は、アヂソンの諷刺談を譯したるもの、全く一段の講義となり了りて、寧ろ早稻田文學か、國學院雜誌にて見たき心地す。

福地櫻痴の『入鹿御誅戮』は、三段より成れる脚本なり。之を劇に演ずれば中々の看物なるべし。

饗庭篁村の『今仙人』、篁村が滑稽の筆致、中々に新進作家の及び難き處あり。逆構面白しといふには非ず、其文脈の輕妙洒脫なりといふのみ。

森鷗外譯『はげあたま』は、鷗外の其雅馴なる文學を以て、一の無邪氣なる滑稽談を譯し出したるもの、譯筆傳神の妙に入り、之を讀んで快感に堪へず。此新小說中尤も第一と推すべきもの。

森田思軒の『一月一日』は、『アッチック、フヒロソフアー』の一章を譯出したるもの。文字はいつもながらの直譯的にして、而も雅健なるは、流石老年の功。

須藤南翠の『鷹のかり裝』、これ位のものならば、今時の新進作家に、幾人なりとも、作り遂げらるべしと思ふは如何に。

學海居士の『思ひ懸ぬ屯』、例のやさしく眞面目なる文字にて、一の笑話をなす。居士のには、近頃目新し。

露伴の『佐渡が島』は作者が佐渡遊歷中に出合ひたる、一少年の失意談なり。紀行の文と、可哀の物語と、此處露伴ならではと思はるゝ節多し。いと面白く、また哀に讀まれぬ。

◎沖の小島　弦齋作　春陽堂版

其序文によれば西洋小說ジルブラス中の一節フェータルマレーヂを飜案したるものといふに、其物語の筋は上總國周准郡佐貫の城主志駒左靈義高なるものあり、其弟同苗藏人義澄なるもの、兄と仲惡しき事ありて、同國小島の城に立籠り佐貫の城と合戰に及びて敗れ飯野六郎の爲に打取らる、其遺子二人竹若菊若も亦、飯野六郎が爲めに打たるべき筈の處、義高が老臣天羽郡天神山の城主、恩田伊織に救はれ、菊若は佛門に入り、竹若は伊織之を鞠育す、伊織の意は竹若を以て義高の獨り娘友鶴姬の婿となして、志駒家の正統を存せんとするにありしも、義高之を用ゐず、友鶴姬獨り之を發す、然るに竹若はまた伊織の娘朝露の夫となりて、恩田家の相續たらんと欲し朝露竹若の戀情旣に成立しあり、然るに義高兵を起して、藤岡姉が崎の城を陷れんとして、敵矢に斃れしため、老臣等の勸言により、竹若父の仇なる伯父の家に入りて、統を受け、所領敵地を平定したり。然りと雖も竹若は彼友鶴姬と婚するの意なく、偏に彼朝露を慕ふて、恩田家の相續となり、志駒家を弟菊若に與へんと欲したるに、恩田伊織は、竹若等の父を殺したる飯野六郎の娘朝露を求むるを利として、彼六郎の驍勇を、主君の爲に供せしめんとして、我家の婿としたり。竹若失望、婚禮の夜に六郎を囚へて、情を朝露に通ぜんとしたる事、六郎之を知りて、牢を遁れ出でゝ、恩田家に赴きて、竹若と刄傷に及びて傷けられ、朝露は六郎の刄に死す。終に竹若世を遁れて蹤跡を失し、爲めに菊若、友鶴姬の婿として、志駒家を興すといふ。

相變らずの弦齋物、舞臺數の多きと、變化の賑しきと一寸豬き見ろには、何の苦もなく讀まるゝとによりて、婦女子の愛讀を得るなるべし。

◎釋元恭　春陽堂版

釋元恭氏は一疑問なり。上島長久君、親から氏に就て聞たる大要を經として一部の快傳記を織成したり。抑そも舒老會の實際の如何なるかは吾人の頗ぶる聞くとを欲する所なれども、此書に於ても亦茫として明らかならず。唯だ幾分知名の吾日本人が斯く迄に橫行濶步し得る支那國の廣大を羨む。

◎一葉全集　博文館版

故一葉女史樋口夏子氏の美文を輯めたる『一葉全集』出づ。收むる處『にごり江』

『われから』『ゆく雲』と『たけくらべ』等二十一篇あり。然るに全集とはいふなるに、國民の友に出でたる『わかれ道』と『うらわか草』に見えたる『秋あはせ』との見受けられぬは何故なるか。一葉女史の美文に就きては、聊かいはんと欲する處あり、次號を期す。

○女學雜俎

一月上半期

◎内助を望む
◎紫瀾先生の姫女兩英雄を談ず
◎紀州三石講話
◎女子教育の方針(東海の餘瀝)
◎新撰女大學
◎佛蘭西の女子高等師範學校の師範學校女子部の存廢
◎女子教育一斑(三十二)三輪田眞佐子
◎女子教育と嫁入(本多庸一氏談)
◎小學女教員に教育學を講習せしむべし
◎想何に就いて(月川娩花)
◎日本婦人に就ての注意
◎佛教夫婦論(櫻井學雄)
◎賢母の紀念
◎女德の涵養は男子の敗德に關係ある歟(雨夜子)
◎都內の婦人に就て

やまと新聞一月七日
讀賣新聞一月九日
同　一月十七日
時事新報一月十五日
萬朝報附錄一月十五日
(宮城縣教育會報告書)
教育時論第四百二十三號
女鑑第百十四號
日本の家庭第二卷第一號
教育報知第五百三十五號
秋の聲第三號
太陽第二卷第一號
密嚴教報第百七十五號
福音新報第二十九號
東京經濟雜誌八百五十九號
[illegible]第二號

片　之

◎新撰女大學　に第一等賞を得たる野中千代子は、女子の心得十ヶ條を擧げ來りて、而して多く論述せず、多言せざる處、尤品たる所以か。

◎雨夜子氏　淨土教報に據りて女德の涵養は男子の敗德に關係ある歟と疑つて、本誌前號々の長江、幽蘭二人の說に反對を試む。題目の疑辭既に氏が女性の本相に通ぜざるを說いて、多く共に論ずるの要を見ず。由來女子を知らざるは、男子の放肆點なり、一家一國の大事、多く此弱點のあやまる處となる。

◎李鴻章と支那婦人　明千八百九十八年英國倫敦に於て、英國婦人大會の開設せられんとするを以て、李鴻章は二人の支那婦人を之に派遣すべしと、某外國傳道師に語りたりと。之れ果して少筌の眞意か、果たまた英雄一時の權盲か。

◎山梨縣郡內　俚諺あり曰く郡内の名物は物價高きと女天下と。

◎大倭心　女學雜誌合併の事、端なく雅量なき基督教徒の心配種となりて、樣々に附會の說をなすぞ氣の毒なる。諸氏漫りに我が爲に憂慮を勞うする勿れ、親しく本誌の眞相を見よ。

◎基督教徒の　雅量なくして偏屈なると、國家主義論者の偏狹なると、其偏狹の本質に於て、殆ど相似たり。諺に曰く、兩極端は相會すと。

◎宮城縣教育會　諄々として師範學校女子部の廢すべからざる理由を說き、女教員を增加することは女兒就學を奬勵するの道にして、これ目下の急務なりとして、縣知事の同學校存廢諮問案に答ふ。

◎密嚴教報　に八回の誌上に渡りて佛教夫婦論をなすものあり。結論に曰く誰人かいふ佛教に男女夫婦間の德義なしといふと。誰もさかくはいふまじ、論者自ら先づ此疑問を設けて其解釋を試む、其志や可憐なり。

◎大政治家　ムーデー氏亡母の高德を賛して、氣情露呈、字々愛に溢ら涙多し、氏曰く事に臨みて自ら之を決するに苦しみし時常に母に訴へて其意見を尋ねたりと今や慈敬して福音新報に在り。

◎英國少女愛讀の書　英國に於て十六才未滿の女子の好んで讀む是の書中概ね左の如きものありといふ。

"Ivanhoe" Lytton's "Harold" "David Copperfield," "Old Curiosity Shop," "Nicholas Nickleby," Lamb's "Tales from Shakespeare," "King John," "Merchant of venice" Scott's "Marmion," Tennyson's "Princess," Mrs. Browning's "Cry of the Children," "Longfellow's "Evangeline," "Alice in Wonderland," "Robinson Crusoe," "Uncle Tom's Cabin."

◎やまと新聞　代議士の妻女のよく內助の効あるあらんことを求むとて、其妻女等は左の箇條位の心掛けあるべきものなりといへり。

一、良人の政見の梗概を明らかにする事
二、撰舉區民の多數は如何なる政見を有するとの事
三、良人は如何なる持說を公にして當撰の榮を得たるかを知るべき事
四、開會中は力めて良人の言動を明かにして良人と撰舉區民との交通機關たるべき事
四、若し良人にして節を變じ、操を沽らんとせば、力めて之を匡救して、猶遂に

使めしむる能はずんば寧ろ選擧者に置きて良人の名譽を思ふに暇あらざるべき事、代議士の細君たるもまた難いかな。

◉世は樣々　熊本の今五斗兵衛の何某は一小の女いづかたへへんづきするさも二ざゝふたゝびく上もなす可らず候さ書きて妻の求むるまゝに離縁狀與ふるものあり、奈良縣某の妻は可愛い良人を產みたる親さおもや姑が鬼じやさてさ詠じて、姑の苛酷を恨みざるものあり、世は樣々。

時報

皇太后陛下御崩御

皇太后陛下は、去る八日より肺患に罹らせられ、十一日午後第六時青山御所に於て崩御あらせられたり。御履歴を伺ひ奉るに、御諱を夙子と申し奉り、故關白從一位尙忠公第六の御息女におはしまし、天保五年甲午十二月十四日（陽曆一月廿三日）を以て御降誕あり、嘉永元年戊申十二月十四日、御年十五を以て、先帝の後宮に入內遊ばされ、嘉永六年癸丑五月七日に准后の宣下あり、慶應四年戊辰三月十八日、皇太后宣下あり。先帝崩御後正に三十年今年寶算六十四を以て登遐し給ふ。

◎華頂宮殿下の御結婚

華頂宮博恭親王殿下には、今回勅許を得て、公爵德川家達氏の令妹さの御結婚の約成り、一月九日を以て、目出度華燭の盛典を擧げたまへり。

◎婦人受賞者人名

客臘二十五日を以て婦人の論功行賞ありしと及上七等級受賞者の人名は前號に記載し置きたるが、今又賜金二十五圓以下賜金三圓まで、下七等級の受賞婦人の姓名を左に錄す、

◎賜金二十五圓

大迫さき、田中させ、山田いほ、野田さみ、佐藤猶、稲川りゑ、神藤たい、加藤さし、高木さよ、青柳なほ、淺井むめ、三木勇、大塚まもる、婦士まつ、吉岡きぬ、坪島すゑ、高木てる、岩部しづ、忍うき、篠原いま、田中ゑつ、服部やす、杉島かれ、山本やな、熊谷はる、藤村みち、東きぬ、長澤しな、合田部、九津見歐、谷金、磯島みよ、太田きの、渡邊金、山本鎗、中村あい、村田かく

◎賜金二十圓

坂元櫻野、淵﨑そよ、淺山よし、菊地やす、西澤みれ、岩元信、津田たき、野村じやう、中村くに、牧やす、木澤あい、小牧ぬい、向山つる、宮田ちか、片山ふさ、中村みれ、土居すゑ、吉村たか、松川ひさ、淸水ふき、加島ふく、太田なみ、山田ひさ、久島さみ、田村むめ、村上茂、松原みつ、池本つたゑ、山田小松、林八重、山部さめ、谷田傳、武內みれ、柴岡鏡、高橋菊、土居ちか、早川くら、田中あさ、倉田光枝、市川たけ、大久保れん、植山みつ、原よし、土田すゑ、藤野鶴代、御園まつ、加藤はま、高村ます、九ノ里さよ、橋邊つじ、池田さわ、

◎賜金十五圓

井手ます、庄司たつ、加藤秋信、住江かれ、庄田もよ、佐藤梢、河合きん、三木玉香、周防長、加藤まさ、松澤ゑつ、増田乙喜、堀越たか、黑川たか、家村孝、林英、城させ、近藤かつ、野田かれ、神山きよ、田島ひで、岩瀨香、大平きよ、石川なつ、星さよ、山本総、西村たみ、磯田藤榮、廣瀨れん、青山なか、田宮てい、佐々木緋江、杉本時衛、二階堂小菊、堤澤きよ、鹽見ふさ、弓削すみ、河野愉露、伊東しま、燕きち、荒川もさ、田中さだ、大原なみ、鹿野さみ、御園いま、竹內はま、荻野はる、小泉みき、藤林ます、黑山ふさ、平出かつ、井上ぬい、杉本ちう、安井もさ、松本ちか、山根ろく、日下つれ、東たつ、羽田ちづ、佐藤ふじ、小松みちよ、渡邊きくの、川村さき、金岡みつゑ、佐伯つるよ、淸野ゑい、齋藤いよ、鎌田しげ、駒井やす、阿部はるよ、横內さめの、梶沼さもよ、眞山たか、高田はる、北村ぬい、岩淺わき、伊藤ひさの、松井まき、鈴木はま、乙政まき、金田たつ、永嶋しゆう、永野ゑい、秀島はつ、宗村みつ、西嶋峰、松下さく、矢田部ます、姉川さこ、

◎賜金十圓

高島りく、土屋かれ、諸井くま、梅津さと、給谷禮利、松居喜登、荻原たけ、酒井ひさ、矢頭にけ、野崎しき、坪井こう、岡本たつ、若山ちう、牧野まさ、御園はま、山本のぶ、北村くに、吉田やす、土肥しげ、花田まさ、末永ちよ、鈴木すゑ、渡邊りう、秦たき、景山小富、松良すゞ、渡邊たま、田村かう、中島千代、金子やそ、高村せい、垣本しづ、門

屋ふさ、古谷のぶ、土岐いそよ、友近きよ、本庄じん、中村もと、山田のぶ、村尾しげ、野中とし、田那邊すゑ、織田いち、安部かや、田原ゑい、後藤ます、水上てる、佐藤ひさ、高橋れん、兒島はま、河原あさ、内山いし、下田ふじ、三井たか

◎賜金七圓

山上ちよ、石野しづ、佐藤さら、山田すが、加納ゑい、相澤しげ、木下たか、小野はる、伊藤きわ、本間さだ、森みゐ、村山みす、飯塚ゆき、伊藤まさの、中澤やす、中村かめ、加藤なか、末木すて、島畑ちか、林さく、武藤かく、五島てる、宮本たき、渡邊くら、中山春江、黒田てる、北條ろく、坂本眞、鈴木くら、高田やを、岸正、千谷とも、仁東愛、豐島いね、中井かつ、杉山かね、的場みつ、鈴木かず、在田のぶ、大西千代、高柳いそ、加藤てい、加藤ふみ、小野はる、島岡らく、千種やな、朝比奈さら、服部たき、一色のぶ、小野ちゑ、川崎はる、五十嵐きし、時岡しづ、高濱しか、岩谷ゐい、深野まさ、内藤はる、野村織尾、大塚すゑ、梨本ちか、田中くわん、瀬良つね、平澤てい、荻野さめを、關賀たけ、榊原かの、中島うた、小池ちよ、淺井左姫、山本ちかの、岩崎ゐい、渡邊こら、原千代能、原いま、益満いは、平川とも、橋本はる、村瀬ひさ、高須つな、米田さだ、小松あさ、桂はる、阿武きち、西由江、二川ひさ、河原林すが、酒井すゞ、横山もと、吉田むめ、小川よし江、青山みつ、石田たつ、秋間きく、横川さよ、深見ゆた、片桐ひさ、石田すゞ、西岡まき、長谷川りつ、大谷せん、岡家じゆん、赤尾てい、高田むめ、合志千蔭、山北みさ、小島みつ、徳永幸惠、岩橋きよ、衣笠今江、宮崎壽代、杉本とも、德永志記、水野たか、西きく、佐藤きわ、安武とも、三浦みね、片山いち、城戸よし、石井つて、濱さた、原ひでわ、今道てる、廣瀬しづ、陣野さよ、篠原さき、谷ます、河村きち、佐藤いよ、

◎賜金五圓

森田ゑい、村上須磨、鳥居きん、杉野ちせ、福澤ゐい、新居きさ、井上とく、木谷さく、坂部つる、中村ちよう、川口もと、野島はる、佐々木とよ、栗佐井みつ、岡さは、三浦操、大黒信、山路井さく、田中露枝、井上京、小川きく、大西きく、大友ふさ、原よね、松本こと、福澤さよ、野村千代、齋藤はつ、松木むら、稻川まん、飯島かね、岩山わか、水野けい、梶澤よし、内田ぜい、宮島こう、樋口ひで、野津たみ、永戸きよ、山村れん、津戸あい、岡村きくや、小澤みさを、内海つる、内海くら、高橋まさ、吉田じゆん、大久保こたま、安藤ゑん、楢臣ふみへ、藤原きくの、服部てる、佐々木ちか、森山いし、水上ひさ、大野ゐい、野々村はる、安田ゆき、平野こう、堀江ゆき、入江たま、二宮つる、佐藤すゑ、町田みつ、瀧野みつ、平野よし、田中たけ、間瀬ゆき、青木るい、島田みち、大塚元能、阿波楽、五十嵐たま、原むめ、小谷つね、江潟よね、藤村しん、木村はるゑ、竹村つま、金子はま、龜井ゑい、島田せい、小川ふゆ、八坂さだ、山田つね、窪田たか、丹羽ひさゑ、清水つな、片岡ひさ、岡田さた、宮武なるを、星子ひろ、後藤千代女、今井みわ、赤阪かや、町田ゑい、栗川さよ、福永はな、富とも、岡田ふで、相眞さく、有川みさ、永田あい、永田なか、上村つげ、本田つや、園田のぶ、松本ちか、樺山まゆ、佐々木ます、堀千年、井手すが、後藤そで、田中たま、藤田ひで、生野みどり、堀とよ、小川こう、濱しげ、小河原さみ、三浦ちよの、阪本ひで、香川あさ、米澤たき、加藤いわ、中原きぬ、横田まつよ、中井さか、佐々木むら、紀伊國みさ、笹田たき、今井みな、藤田つね、濱井こう、藤田やす、宮原すゑ、北川ゆみ、中村よし、

◎賜金三圓

武山こと、成田みつ、林はな、服部たま、渡邊とも、堀尾つう、名倉かた、上田れい、柴山かめ、大橋かね、藤村千代、有我ゑい、片野のぶ、中村えん、廣田ひさ、江澤まさ、早川しげの、水田つる、神尾しか、荻きく、野瀬なみ、黒川てう、原田ゆか、臼田次司、關根てつ、眞山かめし、水谷しげの、内田ちか、松岡こてう、岡のぶ、豐田きく、丹上賓、洗木さき、中村花舞、源塲みゆき、村田れう、中島かめ、西村みほ、大塚しゑ、武井らく、林原しげ、立脇みき、佐々木はつよ、間瀬みつ、渡邊さよ、吉坂させ、加川さよ、大谷嶺、駿河なか、駿河みどり、津田操、七尾順、落合あや、八田澤、石川なか、中吉孝、大家初枝、金子あき、岩崎かめ、菅谷ふさ、河内ちか、石崎ゆき、水田りう、奥津よも、山本乙亥、岡澤ちか、池田みし、安田惠美、伊藤しげ、廣澤きくの、三木きん、田部井はる、久野まち、石渡あき、佐野やす、齋藤しげ、堀江なべ、菊地ます、里見なみ、佐々木しげ、西澤きよ、細谷はま、臨岡さかえ、玉林章、平井ちやう、山鹿しづの、片むつ、澤木常鉄、猪股ゆき、木村たゞ、山本たけ、井山しず、中谷とみえ、寺川たか、玉木常盤、上羽しま、原田きぬ、依しゆう、小瀧ゆき、山口てい、松浦かぎ、兼松あや、吉村ふく、下山わか、杉屋せき、五味ひすよ、服部さく、小川かね、山田しげ、中村はつ、稻熊ゑい、濱本まき、岡本くに

◎故南夜ひさ子女史　本月五日永眠ましたる故南夜ひさ子女史は、播州明石の人、明治十七年神戸英和女學校を卒業し、其後、京都同志社女學校及び神戸女學校の教師となりしが、廿五年夏米國に遊學しカルトン大學に入學し、卒業して理學士の稱號を受け、廿八年八月歸朝後、東京香蘭女學校を補助しつゝありしなり。女學界此般の教育ある女秀才を喪ふと、痛歎の至りなり。

◎近江婦人慈善會　は本月六日午後一時より近江大津町交道館に於て開會し來會者は百餘名にして本願寺派出員捌月政臣氏外數名の演說、報告あり餘興には有志者の寄附に係る明淸樂及び和琴三絃の合奏ありたりと。因に記す同會目下の積立金は、三千六百餘圓あり此程同地方水害罹災貧民に防寒用としてフランネル數十反を惠與せり。又不日看護婦養成及びレース技藝教授等に着手すと云ふ。

◎安井てつ子の出發　家政學、教育學研究の爲英京倫敦留學を命ぜられたる高等師範學校訓導安井てつ子女史は一月十六日午後二時新橋發列車にて出發したり。

◎松山女學校の看護科　松山女學校には昨年末より看護學科を設置し、同地衛戍病院長一等軍醫正渡邊榮造氏之を教授すといふ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

鈴木弘恭大人講述

第六版

百人一首講義

附録　小倉のてびき

正價金廿八錢郵税四錢

本書の講義の甚だ叮嚀親切なる、又其釘裝の頗る清楚なるは、世上既に公評ある處にして、版を重ぬると、亦六回に及へり。小倉山荘の障子に、百人一首を撰書して、幽寂を味はへりし、定家黄門の樂趣を知らんとせば、此講義に就くに若くはなけん。

發賣所

東京麹町區下六番町六番地

女學雜誌社

海國少年

每月一回十五日發行

第一年第一號

明治三十一年十月八日發行

◎口繪●日本最初海軍教師和蘭人肖像●帝國軍艦富士號●勝海舟伯眞蹟◎發行の辭◎祝詞には牧野伸顯君他數君◎論説には河島醇君の僥倖を望む勿れ●肝付兼行君の海軍士官の眼に映する將來我國民教育◎史談には勝海舟伯の長崎海軍練習所の談●英傑逸話◎小説には紫ぐるま涙影●逆浪直下の孤舟美談◎彙報皇太子殿下の御馬術等數件◎文苑人生の歌一〇生●古里の松雪江他新体詩並に詩歌◎雜録には海大の意氣巨濤●遊學案内◎江湖色々◎穎才文壇には歌園詩海文林等穎才諸君の寄稿あり●考物●色々◎廣告●定價一部五錢郵税五厘●半ヶ年郵税共三十三錢●一ヶ年郵税共六十錢

●見本を要する人は郵券六錢送付あれ

發行所　東京麹町區富士見町二丁目三十三番地　東光館

總裁　小松宮御息所殿下

副總裁　鍋島侯爵令夫人

大日本女學會

有栖川宮御息所殿下始め賛成員貴婦人方八十名

會員募集

●本會の目的は家庭教育の本源たる女子教育の普及發達を圖らんが爲め女子に必須なる學科を掲載したる講義錄を發行し小學卒業後入學すべき女學校の設け無き地方又は父母の許を離れ難き女子をして自修せしむるに在り其學科の程度は成るべく實用を主として平易に講述して務めて浮佻の風を避け一般婦人の智德を進め品位を高めんことを期す●講義錄は女學講義と名け其講述の周到懇切なる編成の優美高尚なる所謂花も實もある家庭の良師なるとは世上識者の定評也特に畏くも毎巻皇后陛下御覽の光榮を荷ひ且つ今般御歌下賜を給ふす●總べて講義の質問に答へ和歌習字に添削批評を務す●講習期間を二ヶ年と定め毎月一回廿五日に發行す其紙數は菊版二百頁以上にして毎巻巻頭に殿下之始め貴婦人方の肖像を掲け其他多數の圖畫を挿入す

掲載科目及擔任講師

●修身	子爵	福羽美靜君
●國文	學習院教授	關根正直君
●作歌	華族女學校教授	坂正臣君
●地理及歴史	文學士	大森金五郎君
●理科	理學士	脇水鐵五郎君
●博物	理學博士	石川千代松君
●作文	城北中學校長	今泉定介君
●習字	御歌所勤務	大口鯛二君
●家事經濟	女子高等師範學校教諭	後閑菊野君
●育兒	女子高等師範學校教諭	後閑菊野君
●家庭教育		三輪田眞佐子君
●生理及衛生	醫學士	吳秀三君
●看護法	醫學士	吳秀三君
●禮法	女子高等師範學校教諭	佐方鎭子君
●裁縫	東京女學館講師	渡邊辰五郎君
●割烹	東京女學館講師	田邊和氣子君
●活花	東京女學館講師	田邊和氣子君
●點茶		田邊和氣子君
●小說		依田學海君
●お伽譚		嚴谷小波君
●詞藻		
●雜錄		
●雜報		

會費は東修卅錢月謝卅錢一年分前納三圓四十二錢二年分全六圓四十八錢●目下第十五卷迄發行、各卷共再版出來せり●詳細なる會則は通知次第送呈すべし

東京市麹町區土手三番町廿八番地

大日本女學會

孤女學院義捐廣告

女學雜誌第四百三十一號社說欄内に掲げられたる主旨により瀧の川孤女學院へ物を寄せんとす、仰ぎ願ふらくは、四方の仁人左の規定によりて義捐をたまはらんことを

一金員は四月三十日迄の間に、物品(慈善市用)は三月十日までに、上唱者へ宛て寄送願上候

一金員又は物品受取人差出し候節は持參の符號御照しあはせの上、御申込書と御引換現品御渡し給はり度候

一慈善市開會の時日及び場所は追て御通知可申上候

明治三十年一月

東京麹町區五番町十六番地　小鹿島筆子

京橋區新榮町七丁目廿六番地　小宮珠子

小石川區水道端町五十三番地　添田秀子

赤坂區榎坂町五番地　元眞米子

麹町區下六番町六番地　吳久美子

[illegible]業[illegible]誌 第六十三號 一月十三日發行

[illegible]肥料[illegible]を論じ[illegible]用防禦策に及ぶ●伊豫砥部[illegible]彫身[illegible]○[illegible]崩御吊[illegible]○コッホ氏[illegible]果樹[illegible]○[illegible]都吟[illegible]與報告數件[illegible]種物分[illegible]大湖[illegible]陸稻試[illegible]北○[illegible]使用[illegible]器械[illegible]定價[illegible]粉[illegible]苗[illegible]精選[illegible]二數[illegible]○[illegible]半年分(十八冊)郵稅共前金[illegible]圓六十錢○見本御[illegible]郵券十[illegible]投[illegible]あれ○每月三回每五の日[illegible]

種苗類發賣

[illegible]追々春期[illegible]苗木移植[illegible]精選種苗澤山準備致居候間何卒多少に拘らず御注文之程偏に奉希候尚種苗定價表御入用の向は貳錢郵券一枚封入の上御申込あれば直に呈送可仕候

東京麻布區本村町二百十三番地

學農社

切拔通信の要旨

●切拔通信をなすへき條目は農工商業政治法律外交貿易政黨[illegible]教育宗教[illegible]史詩[illegible]運輸交通土木建築鑛業山林[illegible]各人身上に關する事[illegible]其他諸新聞紙上に掲載の件は小說[illegible]の外[illegible]まで其委託に應し[illegible]く勉めて[illegible]に[illegible]して以て[illegible]

切拔手數料大要

●一己の身上に止まる通信は一ヶ月金貳拾錢とす●[illegible]又は一事物に止まる通信は壹ヶ月金壹拾錢より金五拾錢まで●一會社又は一[illegible]全般に關する通信は壹ヶ月金五拾錢より[illegible]まで●[illegible]記事の[illegible]さ雖さも[illegible]の範圍廣く日々記事の多數なるものは臨時の契約を爲すことあるへし●月數に拘はらず件數にて委托せらるゝものは東京は十件に付金貳拾錢地方は[illegible]金參拾五錢とす尤も細事項は[illegible]して號外さして件數に記入せず●本社切拔通信規則[illegible]御入用の方は御通知次第郵送すべし

東京市京橋區釆女町廿一番地

東京通信社內

新聞切拔通信[illegible]

孝明天皇祭唱歌

右[illegible]文部省撰孝明天皇祭歌ト遙拜式歌小山作之助先生作曲孝明天皇三十年[illegible]刊行セシモノニシテ學生諸君ハ勿論一般和スベキ唯一ノ唱歌ナリ

定價一葉金一錢五厘●郵稅十葉マデ金二錢●一時ニ百葉以上取纏メ御注文ハ一葉一錢マデ御割引可仕候
[illegible]行[illegible]良輔羽作美靜先生作祭遙拜式歌トヲ合セテ[illegible]士人トモ必ラズ唱

音樂 第六十五號

一月廿五日發行(每月一回廿五日發行)

定價一冊金八錢郵稅五厘●半年分六冊前金[illegible]五十錢○一年分十二冊前金一圓

新荷着 ラッパ

樂隊用樂器西洋珍樂器種々

右澤山新着仕候間何卒多少共御用被仰付度希上候

●出版書籍 西洋樂器 **目錄**(御請ニ應ジ呈進仕候)(但シ郵券二錢御添可被下候)

發賣元(電話本局五百廿九番)

東京市京橋區竹川町十三番地

共益商社書店

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

日本宗教界評論の評論

日本宗教

一月二十日刊行
第二卷七號要目

口繪 釋迦
●明治三十年……社説
●根本的改革とは何ぞ……社説
●政治論……嚴本善治
●社會の罪とは何ぞや……久津見息忠
●現今佛教の弊源……加藤咄堂
●淨穢階接觀……山形東根
●佛教は二十年間忍耐すべし……戸川安宅
●基督の世界戰爭觀……青柳猛
◎大谷派本願寺改革運動の詳報
◎明治二十九年宗教界一覽表（後半期）
●アルメニヤの同々教徒に代りて基督教國民に與ふるの書……赤石類一
●宗教移植者……岡環子
●豆州所見……姉崎正治
●基督教の說教……櫻井鷗村
●婦人の宗教的信仰（婦人と迷信との關係）……硯湖花
●各地方の人士に望む（日本宗教記者）●東北と九州及大坂と宗教●迷信打破論の流行●妙好道德經は戰爭のみ●昨年に於ける基督教傳道●宗教革命に於ける日本の地位●宗教上神聖なる數字●新著批評●新刊雜誌細目錄

一冊定價八錢郵税九厘、六冊前金郵税共四十八錢

發行所 東京麴町區下六番町六番地第七號舍 日本宗教社

明治女學校 圖書寄附募集廣告

本年二月五日我校不慮の火災に類燒せし際、多年珍藏の書籍悉く灰燼に歸して、片影をだに留めざるに至れり。然るに我校は大方有志の同情いと懇篤なるによりて、再築の計畫の着々として其途に在ると共に、學校組織中の甚だ重きをなせる智識の倉庫たる書籍館を再興且盛美ならしめんと欲すると切なり。幸に有志の既に、堅牢なる書籍庫の建築寄附を約せらるゝあり、之に充たさんは、五車の書尚は少しとなすべし。由つて天下の仁人に向ふ、冀くは之に盈て、之れを盛んにせんか爲めに、或は珍藏の美書を割愛せられ、或はまた高著の其書を寄贈せられ、以て我校をして、永く其芳志を記せしめんことを

明治廿九年十一月

明治女學校圖書館掛 謹言

○和漢洋書類何種のものにても御寄附相願候
○御寄付なし被下候に於ては、地方にては、運賃立替御送附相成度 然らは請取證差上げ申候際、御返却可致候也
○また市内にて候はゞ、御一報次第受取人差遣し可申候。

基督教新聞

定價郵税共
一部金三錢
三ヶ月金二十八錢
六ヶ月金七十三錢
一ヶ年金壹圓四十錢

基督教新聞は基督教界に於ける最有力の新聞にして發兌以來十餘年今や愈々改良を加へ議論の區域を擴張し其の材料を精撰し附に內外諸名士の肖像を掲げ以て大に讀者諸君の好意に報ゐんとす趣味あり光彩あり其の議論は正經にして東西最進步の輿論を代表し其雜報は內外の教事を詳報す其外家庭欄說教欄皆有益ならざるなし願くは教界內外の君幸に愛讀を賜へ

東京本郷東竹町三十四番地 基督教新聞社

故若松賤子女史譯述

小公子

全一冊洋裝美本
册數三百五十頁
正價金三十五錢
郵稅八錢

近代歐米の讀書社界を震動し、劇場に演ぜらるゝと數十百回、一代の流行を左右して一時年少の子をして悉皆小公子の如くならしめしと云ふは、此書原本奇代の勢力なり。純潔無邪氣、天使の如き一少年は、頑陋執拗の老侯爵を感化し、德に隣あり、母に佳人あり、貧しきを隣み、小作者を愛撫し、言行惣て甘露慈雨の如し、讀去り讀來るうち讀者亦自から化せらるゝを覺ゆ、何ぞ其の可憐高潔なるや。少年固より讀まざる可らず、婦女老人亦讀まざる可らず。賤子女史曩に其前篇を譯して世に公にするや、譯文の巧妙を以て亦た一時に喧傳す。森田思軒居士之を以て明治年間譯文の最上乘のものとし、激賞措かず、曾て其第一頁を見て忽ち驚き、一夜通讀、曉に徹し遂に巻を棄る能はざりしと云へり。然るに女史其後篇を公にするに及ばずして不幸長逝し、知人愛惜の情を寄せらるゝと切なり。即ち茲に其遺稿を收め、女史が一周忌日に會せんとして前後二篇を合せ刊行せしむ。其友湘煙中島女史は字を題し、鄕友松井昇氏は密畫を附せん、同好の士、希くは一讀を賜へ。

出版元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

大賣捌　東京麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

社告

布川静淵、小此木秀野合著

俳諧史傳

定價二十七錢
郵稅四錢

巖本嘉志子

若松賤子英文集

正價六十錢
郵稅四錢

ベビー手みしん

正價五圓

明治廿七年一月十四日內務省許可
明治三十年一月廿四日印刷
明治三十年一月廿五日發行

發行兼編輯者　東京市麴町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　根岸高光
發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場
（電話十九番）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

明治廿五年三月十五日遞信省認可

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY